妻、よい母、よい祖母、よい伯母であつた。即ち日本婦人としての典型的であつた。これはその強き愛情と深き叡智とがよく一體となつて居たからであらう。

この良妻賢母梅颸は天保十四年十二月九日、八十四歳の長壽を以つて終つた。墳墓は廣島比治山安養院の夫春水の墓に並んである。

梅颸夫人の香ばしい名は、山陽の遺芳と共に萬世不朽に輝くであらう。

梅颸がかく立派な母たり得たことにはその父の敎訓の與つて居ることを見のがしてはなるまい。

「人には人情と人道とあり、人情はしのびがたく、やまれぬもの也。これなければ人にあらず。又人道といふは、道理のたがへられぬものあり、これなければ、人たるの本體なし。故に人情のやむにやまれぬ事ありて、むせびかへり、こがれはつるかなしみあればありとても、又どうもかうもたがへられぬもの有事を天性也、本心也、人道也、能く明らめ悟りて、きつと情の行まゝなるを制して、ほしゐまゝにせず、きつと立すへ、堅く守て變ぜざる、これを人の道を得たりとす。その人情のやまぬありとも人道を以て制すべき事なるに、情慾のみ專に



盛んにして、人道を以て制するすべをしらざる、これ鳥獸の道にして、人たるの道にあらず。世間人間の上、まち〳〵さま〳〵の變ありとも、かふより外かくごすゆべきなく、萬々の事この準則を以てゆくべきよりなし、その所を脱しれば、まよひうろたへなきはづの事也。こゝが合點ゆかぬと、諸事變あるたびに、當惑邪曲を出し、亂逆に至りて、人でなしとなり、世の笑ひものとなり終る事たちまち也。住馴し親里(大阪)を離れ、遠き田舍(安藝)にあるも一人の夫(春水)を賴にして在ることとなるにそれだに又遠く離れ(江戸勤番)、只ひとりおさな子(山陽)を育てける事、賴む力もなく、いかばかりのたけきかなしみ思びつゞくるも、はてしなし。しかれども、どのやうにないてもわめいても、おどりはねても、どふもかふもしようなく、こんきうしごく、せまりきつたる事、神々にいのりきせいし、人々にたのみ願ひても、ならぬ事はならぬ天命、いかんともぜひなく、いつそ死んだら、此おもひ此くるしみあるまいとおもへど、げんざい幼子あり、老たる親(義齋自身)あり、かなしみおもふ夫あり、こがるゝ兄弟あり、死ぬるも死なれず、かゝる時いかんとかせん。さりとていきもならず、たゞ胸にむせかへり、苦しむ計也。しかれども、こゝに、につちもさつちもゆかれぬ。人の道といふものありて、そのせまりつめたる中に、凛々たる道義立ずば、びくともせず、ころ

りともせぬもの有を、能々明め悟り、能そだてやしない、堅く執守るべし。しかれば一切のなげきうれへは、さら〳〵と雪霜のとける如くあらんなるべし。そを聖人も、仁者憂へず、智者は惑はず、勇者は恐れずとこそ仰せられ候。君子わたくしかつてなき故、憂なし、人の憂へ歎きは、皆わたくしかつて、よくより生する也。智くらく、義理すぢ道わかれぬから、めつたに役にも立たぬ事を楽じくらし、うろたへ惑ふ也。勇氣の志なきゆへ、萬事にへこたれ、あしこしすはらず、ひよろ〳〵きな〳〵びく〳〵し、みれんさもしき事をする也。さすれば男も女も、此勇の志立すはるで、仁も、義も、智も、信も出來る也。とかく人らしき人にならんとおもはゞ、心の剛にして、弱からぬが大徳にて、心弱きものは大の損、役にも立たぬを、くど〳〵くよ〳〵おもふも、皆勇なきゆへなり、勇とは、心勇みて強く、ひるまぬをいふ、常々此心をしゆ行すべし。大の徳つく事なり、すでに此の度の事でも、當時此天氣にても、さきだつて順氣にて、天下萬民悦び樂しみしに、かくふり續きて、民皆ほつと、とうわくし、祈り祈禱し、泣き悲しみ、うらみなげき、のたり〳〵よまひ事のおり〳〵かまびすしけれども、天氣よろしとしてせい出してふりぬく、これと同じ事、どういふたとて、どうしたとて、どうもかふもならず、むかふの事、こちのちからにちへとも、どうともしよ



うなく、たゞ〳〵わが心を立すへるより、外はとくとゝんとなき事也。どのように世間の事人間の事、さま〴〵の變事ありとも、覺悟きめる、一かふより外はしようのなき事を能々覺悟きわめ、ずつしりと、てづよく勇志を立て〳〵立すへ、鐵石の如く、びんぼゆるぎもせぬにすつきり人情のやるせなきに負ず、人道の本然を立すへ、戰場にむかつて、馬にむちくれ、君に先だつて打死すべき心持、常々の養にある事にて、今その氣になれば、それになり、くにやつけはながれてやくたゞずになり、たゞ心で心をとり立て〳〵すれば氣しようもつれて強く也。凛々としておかすべからざるの、操を立て〳〵〳〵すへ、あつぱれ手柄、剛のものよ、賢女よ、義齋が子、彌太郎が妻、久太郎が母よ、婦人のかゞみよ、手本よと、ながき世までの、わらひほまれのわかれを、忘るまじきものなり。あなかしこ。

一とふで侍の妻となりては、町人百姓のような根性さげて、役にたゝず。侍の妻とて、人に貴ばれ敬はるゝからは、町人百姓共のやうな根性をさげて居ては、とんと身分がすまぬから格別な所なければならず、格別な所とは、道を守りて勇み剛きにあり。ぐに〳〵なきづら、人に見すべからず、みれんな事、人に聞かすべからず、秋の霜のおかすべからざる如く、りん然とすゞしく、立あがるべし。假にも、弱き涙、もろき根性あるべからず、心で心をとり

なをし、氣で氣を引き立て、憂ひの思ひあらば、うたふて心を散ずべし。くよ〳〵胸にたむべからず、おもふはやまひと也、つがさる。これ藥のこと、忘るべからず。ずべらぼんと心をやるべし。

憂事のかさなる事はいさぎよく世をいとふべき便ならまし
憂事はよは有程のならひぞとおもひながして心はるけよ
何事も定まる道とあきらめて迷ひだにすな歎きだにすな

後二首は前にやりたるやうなり。

七月十八日　父たゝより

靜どのへ

これは梅颺がすでに春水に嫁し、廣島に下つてから大阪の父親へ細々と申送つたのに對し、義齋より懇諭した手紙である。之を見ると夫人が、何か心弱く辛さを親里に申送つたやうにも思はれるが、恐らくさうではなく、夫は不在勝ちで家のこと小兒の養育等一切を自分に托されて居たので、その日〳〵の事を細大とな



く書き漏らさず認め、之を報告したのであらう。

この義齋の手紙は現代に於ても女性のよき教訓と思ふ。梅颺はよくこの父の教訓を守つて居る。

# 吉田松陰の母

親思ふ心にまさる親心けふのおとづれ何と聞くらむ

これは、吉田松陰が安政六年十月二十七日江戸小塚原の刑場の露と消える前に故郷の家人に送つた永訣の書中にある一首である。あの至誠純忠、尊皇攘夷の烈士、

討たれたるわれを哀れと見む人は君を崇めて夷攘へよ

と死にゆく自己を悲しまず、後人に勤皇攘夷を委囑して死んだ松陰が、同時にその親に對して、かくも切々の情を寄せたのである。

この松陰を產み、松陰を育て、そして最後迄、松陰に生きて居た親はどんな親



であつたか。こゝに松陰の父を、そして殊に母を語る必要がある。

松陰の父は、杉百合之助と言ひ、母は瀧子といつた。瀧子は毛利志摩の家臣村田右中の五女で、文政八年二十歳で長州藩士杉百合之助常道に嫁して、長子梅太郎、次男寅次郎(松陰)、三男繁三郎、長女千代子、二女壽子、三女文子を產んで居る。長男梅太郎は篤實眞摯長者大人の風格があり、三男繁三郎は不幸啞者であり、長女千代子は優にやさしき上に忍耐强く、二女壽子は仁俠で信心深く、三女文子は素直で從順であつた。松陰に就いては今更ら語る迄もない。瀧子はこの夫々の特質を持つた三男三女の母である。此の家庭がどんなであり、父百合之助、母瀧子がどんなであつたかは、之を長子梅太郎の書き殘したもので知ることが出來る。

「護國山南麓の園子巖の下に宅をトし、專ら躬耕を以て業とし、其內で終身讀書を勤め、春くには臺柄に見臺を拵へて書を見、子供梅太郎、大次郎の素讀は大概畠にて敎へ、自身も耕

耘の際、常に勤王に係る詩文等を吟誦し、自然と子供の勤王の心も幼年中より養生したり。寅次郎已未年、關東に出立の時、「奉別家大人」平素趣庭違訓誨。斯行獨識慰嚴君。耳存文政十年詔。口熟秋洲一首文。小少尊攘志早決。蒼皇興馬情何紛。云々の詩あるも此事なり。其外、茶山(菅)、杏坪(頼)、山陽(頼)等の稍公其他詠史類の勤王に關し、又は毛利公に係る詩は大概暗記し、常に沈吟したり。弟文之進、時々戯て曰く、「今日は何が付きたるの」と其日〳〵口くせに幾遍も反復吟ずる也。會澤の新論等手寫の書今尚現存せり。年四十、天保十四卯年、藩政改革更張の際、羽賀臺御狩之見合被仰付、引續き盜賊改方百人御中間頭役被仰付、出宿住居にて職中も躬耕讀書は不怠勤たり。無用の話をするを嫌ふ。光陰を惜しむが爲なり。客來りて談ずるも唯々するのみ。敢て自から談緒を聞かず。他人の家に行くも要用を終れば速に辭し歸り、無用の談をせず。曾て梅太郎を戒めて曰く、汝が如く書を不讀して話計すれば話す事盡くべしと。其苦學は久阪義助同居中深く感じ、屢歎賞せり。

一、神明を敬し、潔僻の氣味あり。毎朝家内中にて自分第一に起き、手づから一番の薪水を汲み先祖の靈神に供す。もし病あれば梅太郎又は妻に代らしめ、決して奴婢に汲ましめず、春秋祖先の祭忌日の祭不怠して自から祭る。毛利光公の廟、仰德社及び產土神等へ詣ずるも



年に兩三度宛位にて、必ず前日より潔齋、幣代、御香典の錢は耳白を撰び、清水にて洗ひ包み、深夜より起き、手づから水を汲み湯をわかして浴し、其湯水等へ他人の手を觸るゝを不許、而して參り懸け片道は必ず夜の不明内に參詣す。途中種々の人に出會するを忌てなり。其衣服、上下、懐中扇子、犢鼻褌に至る迄、常に不用別に致し置、決して美を不用、唯清淨を求る而已、歸途も他家に寄ること必ず不致なり。

一、人の親を救ふ事は母の妹岸田氏の病たるを久しく引受、及死去迄看護し、又妻の姉大藤氏の娘を携へ寡居し、兩人共疫病に罹りたる時、引受致保養たる類、皆山中にて躬耕生計艱難中の時なり。

一、慶應元乙丑三月より肝感冒にて或は褥にあり、或は起坐、時としては園中徘徊する位なれども、讀書は不廢、時々庭前の除草抔致し、初秋に至り再感しては御大事と、醫より戒め置たるに不圖七月十五日夕方、浴後惡寒を覺え再感之徵あり。夫より看讀も廢し、兒孫奴婢へも一向怒言を不出、誠に順良にして唯醫言に從ひ、服藥の程度を守るのみにて、絶て病の輕重、治不治等は不問、親類議して他の醫にも見せ度申けれども、青木研藏如此心を盡し、夫にて不治は命なり。色々と心配するは迷と申て承引せず、病革の日、親族枕に圍集りたる

に、今日は宜敷天氣、最早久しくは生ても居るまじく、一つの物が二つに見えると申、第一に文之進へ亡父の遺誨を演べ、夫より順々人別に遺言し、食餌の終り故、梅太郎より喰せよと申候間、一口くゝめ、夫より半日計にて長逝す、實に慶應元年八月二十九日なり。儉素を好み、身に奉ずる薄し、常に僅の盛饌にても坐を改め戴きて食す、衣服は終身木綿計、病中紬のたんぜんを拵らへ着せたるも、毎度是は除けて置くべし、木綿の分にせよと申て、遂に紬の分は不用なり。其タンゼン今猶現存す。」

これは松陰の父の一生の歴史であり、家庭行事記であり、杉家の家風の略述である。こゝには母瀧子に就いて書いてない。然し瀧子はこの崇高とまで思はせる夫と四十餘年の間、不平なく不滿なく、圓滿な同居生活を營み來つたことを思へば、夫の光、家の光りに融け込んで居る瀧子を知ることが出來ると思ふ。

父百合之助は、燃ゆる如き勤皇思想と、氣節大義の武士道精神を以て子女の敎養に勤めた。その敎材は「文政十年の御布令」と「神國由來」といふ本や、會澤安の新論、賴山陽の外史菅茶山の詠史等であつた。この神國由來は玉田永敎の著



で「吾が國は尊き神の國であつて、今日神の國に生れ、神の衣服を着し、神の五穀を喰ひ、神の家に居て、神の恩を報じ奉ることを知らざる者は實に人面獸心なり」と誌して、わが國體や臣道を明にしたものである。

吾人はこの嚴烈な父の蔭に慈愛あふるゝ母瀧子の在ることを見落してはなるまいと思ふ。

かうした家庭故、松陰の兄弟仲は極めて睦じく、外の見る目も羨ましいばかりであつた。これに就いて後年妹の千代子が次のやうに語つて居る。

「この兄弟には兄弟喧嘩といふものが一つもなかつた。共に讀み共に手習をなし、同じ蒲團に寢ね、母がお膳を運ぶと茶碗を移して一つの箱膳の上で、兄の梅太郎と頭を突きよせて三度の食事を共にすることを唯一の樂しみとしてゐた。一つ椀の飯を分けて喰ひ、一皿の菜も共に味ふと云つた調子であつた。」

とは暖い雰圍氣である。

「寅次郎は小さい時から親思ひで、父母に心配をかけたり、氣を揉ませるといつた樣なこと

はなかつた。母が着物を作つてやつても着替へさせようといふまでは、何時までも默つて古い着物を着てゐた。寅次郎は何一つ小言の云ひやうのない、極く手のかゝらぬ子供であつた。」

と母瀧子は談つて居る。母の世話が行きとゞいたから、子供は世話をかけなかつたとも云ひ得よう。

瀧子は士分とは云へ、全く農業生活の夫を助け、朝は星影を頂いて田畑に出て夕は夜露を踏んで歸り、毎晩夜仕事に更し、時には自ら馬を使つて手傳つた。それに姑とその妹の岸田氏との二人の老人を世話し、そして女子の教育に當つて家を治めた、殊に岸田氏は病身で身體の自由がきかぬので、瀧子は二軒分の衣食の世話と、病人の看護もしたのである。姑も病人も「有難い〳〵」と言つて泣いたと言ふ。刻苦、忍耐、慈悲、忠實、典型的な婦人であつた。それ故玉木家を嗣いだ文之進さへ「昔の女丈夫といふのは杉の姉の樣な女を云つたものであらう」と褒めて居たと云ふことである。



瀧子は餘程辛棒强い、意志の固い、そしてどんな苦勞も心痛も、心の奥にひそめて、夫の爲め、子供のため、家のために働いた人である。

安政五年十一月に入つて井伊大老安政の大獄の片腕であつた間部老中が京都へ入つて、志士捕縛の衝に當るといふので、彼を生かして置いては國家の爲めにならぬと、同志十七名の血盟を得て、松陰は蹶然奮起直接行動に身を挺することになつたが、之が幕府に漏れては大變と藩は「松陰學術純ならず人心を動搖さす」といつて之を嚴重謹愼させ、續いて野山獄に投じた。之が安政五年十二月二十六日である。

「一時屈するのは萬世に伸びんがためである。これ位のことで力を落してはならない。まあ我慢をするがよい。」

とは父百合之助の當時の教訓である。然しながら松陰は四圍の情勢を見、自己を省みては痛苦悶々の情に堪へぬものがある。そして遂に瞑想沈思、至誠の功驗

を省み、死生の如何を天に聽すべく、遂に絶食死を思ひたつたのである。

此の報告が同囚の門人安富惣輔によつて兩親に報せられた。その結果、弟子增野德民が早速父母と叔父との懇諭の手紙と、母瀧子の心盡しの手料理とを持つて野山獄へ駈け付けることになつた。

「一寸申まいらせ候、そもじ様いかゞ御暮し被成候や、さきほどにふりよの事、うす〳〵耳に入、あまりきづかしさに申進めまいらせ候、きのふより御食事御たちとか申事のよし、おどろき入り候、萬一それにて御はて被成候ては、ふこう大一、口おしきしだいにぞんじまいらせ候、はゝ事もやまいおふく、よはり候、ながいきもむつかしく、たとへ野山やしきに御出候ても、御ぶじにさへこれ有候へば、せいになり力になり申候まゝ、たんりよ御やめ御ながらへのほどいのりまいらせ候、此品わざ〳〵とゝのへさし送り候まゝ、はゝにたいし御たべ頼みまいらせ候、いくへも〳〵御心御ひきかへ、かへす〴〵もいのりまいらせ候、めで度かしこ。

はゝより



大　様

（安政六年正月廿五日）

これが母瀧子の手紙である。

父百合之助は、「此度之御思立ち不宜、短慮の至りなり」と諭し、更に「母より送り候品御食し祈り申候」と言つて居、叔父玉木文之進も「汝獄中之餓死、大義において何の益あるや」「他人へ申聞する事には眞の道理かと見ゆる所を見付、自身の事に至り候へば、くら闇に相成段、誠に可恠事に御座候」と嚴烈な勸告狀を與へて居る。

松陰は、この父母この叔父の教訓によつて餓死を思ひとまり「水一椀、釣柿一つたべ申候先づ御安心奉願候」と前非を悔いて泣きあやまつたのである。瀧子のこの時の心持はどんなであつたらう。

松陰はそれから幕命で江戸へ送らるゝことになつたが、獄司門人福川犀之助は久坂玄瑞と計つて一時松陰をその實家へ歸らしめた。つまりは永訣の機を設けた

わけである。

「先生のお母さんが、みんな居並んで居て部屋佛壇に燈明をともして、もう一度是非無事に歸させて頂きますと禮拜されたことをよく記憶してゐる。その時は皆シーンとして一言も發するものがなかつた。

と門人の渡邊蒿藤が當時の情景を語つて居る。

母瀧子は風呂場に行つた松陰の背中を流しつゝ、

「此度の江戸行は何んとなく氣遣はしい。寅次郎よ、今一度江戸から無事で歸つて氣嫌のよい顏を見せてお呉れ。」

としみじみといつた。母である。その子が幾つになつても生みの母であり、育ての母である。母がよし涙を流さずとも、松陰がよし涙を流さずとも、泣かぬものは人の子ではあるまい。

松陰はそれから年の五月二十五日、萩の街を後に江戸へ護送されることになつ



た。その江戸長藩梅田邸に着いたのは六月二十四日である。そして七月八日には幕命があつて、九日に評定所に出頭、傳馬町の牢獄へ收容された。

「平生之學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出來不申、非常之變に立到り申候、嘸ぞ御愁傷も可被遊拜察候。」

と書き出し、そして例の「親思ふ心にまさる親心」の歌を書した永訣の書を郷里の家人に送つたのが十月二十日附である。

それから松陰は、横暴非道な幕吏の謬詐惡辣な審問で遮二無二に死罪に陷れられたのである。

松陰の母、杉瀧子は決して學問的な、又社會的な婦人ではない。武勇傳中の一人でもない。幕末に於ける閨秀詩人には梁川紅蘭女史や、野村望東尼もあり、松尾多勢子もある。一事一藝に秀て、善行美談を持つた母も婦人も他に鮮しとしない。瀧子は然しさうした逸話的な人ではなく、家に融け込み、夫に融け込み、子

に融け込んだ母である。清貧の中に堅忍よく家庭的な苦難を嘗めて微動だもなく尊皇精神をその兒等に慈愛を以て植ゑ、而も己を捨てゝ倦まず屈せず、家を處理し、夫に殉じ、愛兒に殉じ、親戚に殉じ、主婦のなすべきをなした人である。この黑土の如く地下水の如き婦人はそれ故その光りを擧ぐるに困難である。光らぬ光の持ち主、それはこの光を與へられた松陰に見て知り得る光である。

松陰は野山獄から妹千代に手紙を與へて居る。これは松陰の婦道觀である。これを見ると、そこに松陰はその母を眼前に描き出して居る如く思はれる。つまり松陰が母より得たものをその妹に傳へて居る如く思はせる。從つてこの手紙を通じて松陰の母瀧子を偲び得るものがある。

「十一月二十七日と日づけ御座候御手紙並九ねんぶ、三かん、かつをぶしとともに、昨ばん相とどき、かこひの內はともしびくらく候へども、大がひ相わかり候まゝ、そもじの心の中をさつしやり、なみだが出て、やみかね、夜着をかむりてふせり候へども、如何にもたへかね又起きて御文くりかへし見候て、いよ〳〵涙にむせび、つひにそれなりに寢入り候へども、



まもなく目がさめ、よもすがらね入り不申、色々なる事、思ひ出し申候、わもじは父母さまやあにさまの御かげにて、きものあたゝかに、たべ物もゆたかに、あまつさへ、筆かみ書物まで、何一つふそくさへこれなく、寒さにもきけ不申候間、御安心可被成候、そもじの御家をばさまも、御なくなられ候事なれば、そもじ萬たん心がけ候はでは相すまぬこと、ことにをじさまも、年まし、御よはひ高く爲被成候事ゆえ、別して御孝養をつくし候へかし、又萬子も日々ふとり可申候へども、心を用ひてそだて候へ、赤穴のばあさまは御まめに候哉御老人の御事、萬事氣をつけて上げ候へ、かゝる御老人は家の重はうと申すものにて、きんにも玉にも、かへらるゝものに無之候、そもじ事はいとけなきをりより、心得よろしきものとをもひ、一しほ親しくをもひ候しが、此ほど御文拜し、入らざる事までも申進候なり

三　日　　大（松陰）

千代どのへ

「別にくだらぬ事三四まい、したゝめつかはし候間、おとゝさまか、梅にいさまに、讀みよき樣に寫してもらひ候へ、少しは心得の種にもなり可申候、さて御たよりの中にも、手習よみものなどは、心がけ候へ、正月には一日丈はやぶ入り出來可申哉、どうぞあにさまの、御

きう(休日)をえらび參り候て、心得になる噺ども聞候へ、拙もその日分り候はゞ、昔噺なり共、したゝめて遣し可申、又正月には、いづくにも、つまらぬ遊事をするものに候間、家道訓などは、丸き耳にも、よくきこゆるものに候、又淨るりぼんなども心得ありてきゝ候へばずい分役にたつものに候

さて又別にしたゝめたる文につき、うたよみ候間、こゝにしるし侍りぬ。

頼もしや誠の心かよふらん文みぬ先に君を思ひて

右をしたゝめたるは、そもじを思ひ候より、ふでをとりぬるが、その夜、そもじの文の到來せしは定めて誠の心の文より先に參りたるに哉と、いとたのもしくぞんじ候まゝかくよみたり。

三　日

一、凡人の子のかしこきも、をろかなるも、よきも、あしきも、大てい父母のをしへによる事なり。就中、男子は多くは父の教を受け、女子は多くは母のをしへをうくること、また其大がいなり。去ながら、男子女子ともに、十歳已下は母のをしへをうくること、一しほおほし、故は父はおごそかに、母はしたし、父はつねに外に出、母は常に内にあればなり。然れ



ば子の賢愚善惡に關る所なれば、母の教へゆるがせにすべからず。併その教といふも、十歳已下小兒の事なれば、言語にてさとすべきにもあらず、只正しきを以て、かんずるの外あるべからず、昔聖人の作法には、胎教と申事あり。子胎内にやどれば母は言語立居より給ものなどに至るまで、萬事心を用ひ、正からぬ事なき樣にすれば、生るゝ子、なりすがた正しくきりやう人に勝るとなり。物しらぬ人の心にては、胎内に含れる、きゝもせず、ものもいはぬものゝ母が行を正しくしたりとて、などか、通ずべきと思ふべけれど、こは道理を知らぬゆゑ合點ゆかぬ也。凡そ人は天地の正しき氣を得て、形を拵へ、天地の正しき理を得て、心を拵へたるものなれば、正きは、習はず、教へずして、自ら持得る道具也。ゆゑに母の行、たゞしければ、自らかんずること、更にうたがふべきにあらず、是を、正きを感ずと申すなり。まして、生れ出で、目もみえ、耳もきこえ、口もものいふに至りては、たとへ、小兒なればとて、何とて、正しきに、感ぜざるべきや。さて又正きは人の持前とは、申せども、人は至て、さときもの故、正しからぬ事に感ずるも、又速かなり。能く心得べきことならず哉よつてこゝに人の母たるものゝ、行ふべき、大切なる事を記す。此他ちいさき事は記さずとも人々辨ふる所なれば略し置ぬ。

○いろはたとへにも、氏よりはそだちと、申事あり、子供をそだつる事は、大切なる事也。

一、夫を敬ひ、舅姑に事ふるは、至て大切なる事にて、婦たるものゝ行、これに過ぎたる事なし。然れども、是は誰しも、心得ぬものなければ、申さずともすむべし。扨かんえうは、元祖以下代々の先祖を敬ふべし、先祖をゆるがせにすれば、其家必衰ふるもの也。凡そ人の家の先祖と申ものは、或は馬に乗り、槍を提げ、幾多度の戰場にて、身命を擲ち、主恩の爲に働きたるか、或は數十年役儀を精勤し、尋常ならぬ績を立てる歟、或は武藝人にすぐれたる歟、文學世にきこえたる歟、何にせよ、一かたならぬ事ありてこそ、百石なり、五十石なり、知行を賜はり子孫に傳へたるなり。その以下の先祖と申すものも夫々御奉公其節をとげたればこそ、元祖同樣に知行を賜りぬる事なり。この所を能々考へ、この一粒も、先祖の御蔭と申ことを、寢ても覺ても、忘るゝ事なく、その祥月命日には、先祖の事を思出し、身を潔くし、體を清め、是を祭り奉りなどすべし。又一事を行ふにも先祖に告げ奉りて、後行ふ樣にすべし。さすれば、自ら邪事なく、する事、なす事、皆道理に叶ひて、其家自ら繁昌行るものなり。もし、このこゝろえなく己が心まかせに、吾儘一杯を働きなば、如何で其家衰微せざらん哉。聖人の敎は、死去りて世に居玉はぬ親先祖に事ふること、現在の親祖父に事



ふ如くすべしとあり。今親祖先現在し玉へば、何事も思召を伺てこそ、行ふべきに、世に居玉はぬとて、先祖の御心を察し奉らず、吾儘計り働くは、是を先祖を死せりとすと申す、勿體なき事ども也。

一、婦人は、已が生れたる家を出でゝ、人の家にゆきたる身なり。然れば已が生れたる家の先祖の大切な事は、生れ落るとより辨へ知るべけれど、やゝもすれば、ゆきたる家の先祖の大切なる事は、思はぬ事もあらん。態々心得べし。人の家にゆきたれば、ゆきたる家が已が家なり。故に其家の先祖は已が先祖なり、ゆるがせにする事なかれ。又先祖の行狀功績等をも、委しく心得置き、子供等へ、昔噺の如く、噺し聞かすべし、大に益ある事なり。

一、神明を崇め尊ぶべし。大日本と申す國は、神國と申奉りて、神々樣の開き玉へる御國なり。然れば、この尊き御國に生れたるものは、貴きとなく賤しきとなく、神々樣を、をろそかにしてすまぬことなり。併世俗にも神信心といふ事、する人もあれど、大てい心得違ひなり。神前に詣で、拍手を打ち、立身出世を祈りたり、長命富貴を祈りたりするは、皆大間違なり。神と申ものは、正直なる事を好み、又清淨なる事を好み給ふ。夫故神を拜むべし。是を誠の神信心と申なり。その信心が積りゆけば、二六時中、已が心が正直にて、體が清淨に

なる。是を德と申、菅亟相の御歌に、心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん。又俗語に、神は正直の頭に宿るとて、信あれば、德ありといふ。能々考へて見るべし。扨又佛と申すものは、信仰するに及ばぬ事なり。されど、强ち、人にさからふて、佛をそしるも入らぬ事なり。

一、親族を睦くする事大切也。是も大てい、人の心得たる事なり。併從兄弟と申もの、兄弟にさしつゞいて親しむべき事なり。然るに世の中、從兄弟となれば、甚疎きものおほし、能々考へて見るべし。吾が從兄弟と申は、父母の姪なり。祖父母よりみれば、同じく孫なり。さすれば父母祖父母の心になりて見れば、從兄弟をば、決して、うとくはならぬ也。併ながら、從兄弟のうときと申は、元來父母祖父母の敎の行きとゞかぬなり。子を敎ふるもの、心得べきなり。凡そ、人の力と思ふものは、兄弟に過ぎたるはなし。もし、不幸にして、兄弟なきものは、從兄弟にしくはなし。從兄弟、兄弔は年齡も互に似寄りて、もの學びしては、師匠の敎を受けし事をさらへ、事を相談しては、父母の命をそむかぬごとく計ふ、皆他人にて、とゞく事にあらず、此處を能く考ふべきなり。茲に一つの物語あり。吐谷渾と申す夷國の、阿豺と申す人、子二十人あり、病氣大切なりければ、弟の慕利延を召て、申すには、汝



一本の矢をとりてをれ。慕利延、之を折たれば、又申すには、汝十九の矢をとりてをれ。慕利延折る事あたはず。阿豺申すには、汝等能く心得よ、一本立なれば折やすし、數本集れば折がたし、皆一致し、國を固めよかしと。國にても、家にても、道理は同じ事なり。とかく婦人の詞よりして、親族不和なる事おほし、忘るべからず。

右に記しぬるは先祖を尊ぶと、神明を崇むると、親族を睦くすると、己上三事なり。是が子供をそだてる上に大切なる事なり。父母たるもの、此行あれば、子供は唯敎るとなく、自ら正しき事を身習ひて、賢こくも、よくもなるものなり。扨又子供やゝ成長して、人の申す事も耳に入る樣になりたらば、右等の事を本とし、古今の種々なる物語、致しきかすべし、子供の時、聞きたる事は、年を取りても、忘れぬものなれば、埒もなき事を、申聞すよりは、少しなりとも、善き事を、きかすにしくはなし。杉の家法に世の及びかたき美事あり。第一に先祖を尊び玉ひ、第二に神明を崇め玉ひ、第三に親族を睦じくし玉ひ、第四に文學を好み玉ひ、第五に佛法に惑ひ玉はず、第六に田畠の事を親らし玉ふの類なり。是等の事、吾みな兄弟の仰ぎのつとるべき所なり。皆々能心懸候へ、是即孝行と申もの也。

此書附は、阿千代、阿壽等に示し可申とて、先日より胸中に、たくはへ候處、所詮讀書の閑

なく、夫ぎりにいたし置候。昨朝無事故、風と思付認懸候、又暮程に見候へば餘り拙き故、止め可申と存候處、夜中阿千代が文を見、涙を流し、所謂鬼の目にも涙とやら、言ふふしにて頻になつかしく相成候故、拙きながら、妹等へ遣し度存候、久しく胸中に蓄へたるを、昨日ふと筆を下し、其夜千代が文參り候事、精誠の感通とも思はれ候、拙きは何とせう、御閑御座候はゞ、半枚五行位に、讀みよきやうに、御認め、兩妹などへ、御與へ被遣間敷哉、乍恐尊大人へ御賴仕可然哉、萬々宜しく奉賴候。

三　日　　寅　じ

この三日附の手紙の後十六日附で矢張り千代子に次の手紙を送つて居る。

「前略、萬子へよみきかせ、申きかせ候事を、樂しみにとの事尤に存候、夫に付一つ思ひ付たる事有之候、日本は武國と申候て、むかしより勇氣を重と致し候國にて、殊に士は武士と申候へば、別して勇が大切にて、小供へいとけなき折から、この事をおしへこみ候事肝要に候、江戸繪や武者人形又正月や端午に弓矢のぼりなどかざり候樣の事もまんざら遊び事にて無之候、又軍書の中にある軍サ之繪など、小どもに見せ候へば自ぜんと知らず覺へず勇氣が



增ものに候、楠正成じヤノ新用義貞ノ加藤清正ノといふ事は、小供に覺させ候がよろしく候又武者百人一首と申ものも有之候、小供に見せ候てよきものに候、紙もつき、日もくれ候ゆへ先づは筆をとゞめぬ。」

これは女子教育に關する大精神である。

祖先を尊び、神明を崇め、血緣の親睦、敬老、勸學、そして胎敎に及び、人たるものは天地の正しき氣を得て形を拵へ、天地の正しき理を得て心を拵へるもの故、母性は此の義を大切とする。子供の賢愚善惡はまつたく母たるものゝ敎へ一つであるとは、不滅の聖典たる大文字であると言へよう。

瀧子の夫百合之助は慶應元年八月に六十二歳で世を去つた。

「寅二郎は斬罪になつたけれども、その精神は朝廷に於て必ず御覽になることであらう。私は決して悲しみもしなければ、寅次郎を哀れとも思はない。我が家の子孫は充分先祖の氣風を繼いでお國の爲に勉强しなくてはならない。」

とはこの父の死に臨んでの言葉であつた。時に瀧子は五十九歳であつた。此の後の瀧子は、敬虔な信仰生活に入り、島地默雷、赤松連城などの教を受け、明治二十三年八月二十九日八十四歳で長逝した。實成院釋智覺乘蓮が瀧子の法名である。

昭憲皇太后は、品川彌二郎より松陰の母瀧子に就いて御聽かれ遊されて、御包(白ちりめん一疋)を瀧子に御下賜遊された。

「先師の顏色やじ(品川彌二郎)が目にちらつき、先師の靈魂は、皇城を擁護して居る心地いたし、御前にて落涙に沈み、漸く前條記載の御禮丈け申上げたり、御推察々々嗚呼。」

とは品川彌二郎が杉民治(梅太郎)に送つた手紙の末文である。

瀧子は皇恩の深きに感泣し、先君及松陰靈前に拜伏して「兒非常に斃れ、先人踵いて世を去り、俱に明時に遭ふを得ず、老婦獨り此の榮を荷ふ。何んぞ悲痛に堪へんや」と涕泣やまなかつたと言ふ。

松陰が大きく日本に生きて居る如くその母瀧子も亦大きく日本に生きて居る。



眞に日本の母とは此の瀧子の如き人を言ふのであらう。

# 大田垣蓮月（誠女）の前半生

大田垣蓮月は、寛政三年正月八日、京都加茂川河畔三本木で生れ、誠と名づけられた。父は伊賀上野の城主藤堂、母は京都の歌妓某である。藤堂は誠子をその碁友の大田垣光古に頼んでその子として育てゝ貰ふことにした。

光古は鳥取の人で、京都へ出で知恩院に勤仕して居たが、これ迄に四人の子を次々に失つて、今は仙之助と云ふ子供一人で淋しく思つて居た處故、この身分高い人の落胤の愛らしい女兒を得たことを、天から授かつたやうに喜んで、實子の如く育てたのである。

とは言へ嬰兒誠女にはこれが幸福なことかどうか、藤堂にいろ〳〵の事情があ



つたとしても、實父母を、實父母と言ひ得ぬ誠女は可哀さうである。

誠女は品位があり、容貌も美しく、流石に高貴の人の落胤を思はせるものがあつた。

誠女はすくすくと育つて、十三の春を迎へたが、此の年大田垣家の唯一人の嫡子仙之助が廿一歳で死んで了つた上、その生みの母、誠女の養母が、四十四歳で仙之助の後を追つて不歸の客となつたのである。この時光古は四十七歳であつた。

薄倖の誠女は、生みの母はあつても母ではなく、そして今迄母と呼んで來たその母をも失つたのだ。物心付く頃、娘となる頃、母の無い淋しさは男子の知らぬものであらう。然しそれでも誠女の心は決して道義に暗くなることは無かつた。彼女は「ちゝはいなばの國の人」と言つて居た如く、實父藤堂氏がひそかに遣はした使の者に、

「自分はいやしい身分の者、さやうな身分の高いお方は存じ上げませぬ。」

と答へて身を隱して、之に逢はうとしなかつた。

藤堂氏がひそかに使を大田垣家へ遣して誠女の消息を尋ねさせたことは、實父の情としてはさることながら、私は贊成出來ぬ。今更かゝることをする位なら、初め大田垣家へやらず、親子の縁を斷たぬがよい。私が誠女としても、その使に逢ふ要はないのであるし、養父に對しても、此の場合使などに逢はぬがよいであらう。義理から言つても、人情から言つても逢はぬが至當である。

誠女は十七八歳頃には薙刀、鎖鎌、劍術の諸武藝に達して居て、清水寺へ參詣した折、戯れかゝつた醉漢を捉へて擲げつけた程であるが、何時何處でかく修行したか明瞭でない。八九歳の頃から武家奉公に出て覺えたのだと言ふ說もあり、家庭で父から敎へられたのだと言ふ說もある。

「棒切れ一本あれば塀位は乘り越せます。」

と老後人に語つたと傳へられて居る位だから、何時、何處で習つたか判らぬにしても、腕に覺えのあつたことは確である。



誠女が十七歳の時、親戚關係のある、田結莊天造を迎へて夫とした。天造はこゝで望古（もちひさ）と名のつた。勿論養父光古の配慮に出たことは言ふまでもない。ところが、此の望古は名門に生れながら、勤務を怠つて、酒色に溺れ、博奕に耽り、手に追へぬ遊蕩兒で、舅の訓戒にさからひ、逆に誠女を打擲すると言ふ始末である。

結婚によつて樂しくなるべき筈の誠女は却つて悲しみを深め、嘆きを加へた。律義な養父光古の思はくは脫れた。そして誠女に對し濟まぬ氣持で暮さねばならなかつた。かうして家庭は憂欝にとざされた。この憂欝の中にそれでも長男鐵太郎が生れた。子供が產れたら又何とかならうと思つて居たのに、その子供は廿日餘りで死んで了つた。不幸はあくまで誠女を離れぬ。

夫望古も流石に悲しみに沈んで、今迄の行爲を改めるやうに見えたので、父も誠女も、どうかこの儘、立ち直つて呉れるようにと念じ合つたが、骨の髓まで虫ばまれた望古は、日を經るに從ひ、悲しみが薄らぐにつれて、また〳〵その本性

を現し、立直るどころか却つて、その放蕩無頼振りは激しさを加へた。それでも誠女は之を夫としてじつと怺へて居た。

かうした不幸の誠女は、その後二人の女子を産んだが、その一人は三歳でまたく〳〵なくなつて了ひ、夫の放縱生活は止まるべくもなかつた。耐り兼ねたのは誠女でなく養父である。

「末の見込もないし、お前にも氣の毒だ、いつそ離別してはどうか。」

だが誠女は承知しなかつた。

「私の因緣が悪いからで御座います。どうぞ離緣話は今暫くお許し下さい。それに子供にとりましては、放蕩無頼でも、望古は父で御座います。子供の爲と思うてそれのみはどうぞ。」

誠女は泣いて父に賴むのであつた。彼女は愛する子の爲めに如何なる苦惱も忍び耐へて行く決心である。妻として不幸でも、此の不幸を母としては子供に移したくなかつた。母として生き拔きたかつたのだ。然し望古の亂行は募るばかりで遂に父の怒りは頂點に達した。そして今は誠女もどうすることも出來ず、父の言



葉に從つて、遂に望古を離緣するに至つた。

放蕩無頼の夫でも夫である。誠女はこの夫を失つた。そこへ更に不幸は誠女を襲つて、二人目の女兒をも奪ひ去つたのである。

親一人、子一人、しかも誠女はこの時まだ二十五歳の若さである。

才色兼備、そしてまだ若い。誘惑がそれを見のがす筈はない。艶歌、艶書が誠女に寄せられたが、彼女は之を見開きもしなかつた。

彼女は自己を守り通した。女の道、女の矜持、それを傷けたくなかつたのである。そこには或は、横暴無頼の夫によつて苦しんだことから、男性に對し信賴し得ぬ心も湧いて居たとも思はれる。

然し、一方には父がある。その父はかゝる間に既に老年となつて居る。その老年の父の愚痴もある。

「折角御門主様から賜つた譜代の御恩命も、相續者が無くてはその甲斐もない。御門主様にも濟まぬ。俺も老衰して毎日の出仕も大儀だ。もう先きもさう長くはない。俺を助けると思

つて再養子をしてくれまいか。」

誠女のつらい所である。父の心持はよく解る。自己を捨てる、自身を捨てさへすれば父を喜ばせ得るのだ、

「お父様の御心にお任せ致します。」

かう言ふ他なかつた。然し誠女はこの時既に決心した。

「それにつきまして、萬一今度迎へました養子に、また不幸が起りました場合は、――その時は、この黒髪を切つて俗縁を斷つことをお許し願ひます――。」

誠女も泣いた、父も泣いた。

「その時はお前ばかりでなく、此の父も頭を剃ります。」

誠女が望古と別した後四年、文政二年、二十九歳の時、彦根藩士石川重二郎が再び養子として大田垣家に迎られた。名を古肥(ひさこし)と名乗つた。古肥は溫厚で、實直で、舅に盡し、妻を愛した。淋しかつた家庭にも漸く春が來た。誠女もこの翌年女兒を擧げた。養父も喜んで、翌年には家督を古肥に讓り、樂隱居の身となつ



た。多幸の日が此の一家に續くべく思はれた。

然し運命はあくまで誠女に悲しかつた。生來蒲柳の質であつた古肥は、文政六年から病臥する身となり、誠女が晝夜帶さへ解かぬ全力的看護の甲斐もなく、その年の六月不歸の旅に赴いて了つた。

誠女は古肥の病革つたその前日、古肥の息のある間に、父と兼ねて約束した通り、その丈なす黒髪を落した。永く二世の契を結ぶ今こそ永久にこの世の縁を斷つ。

これが誠女の三十三歳の時である。

誠女と父の光古とは、それから知恩院大僧正に就いて得度を受け、父は西心、誠女は蓮月と授けられ、大田垣家の家督は、新たに貰ひ受けた同藩士風見某の子古敦(ふるあつ)夫妻に讓り、古肥の忘れ形見の女兒を連れて、門主から住持職を仰せつかつた眞葛庵へ移り住むことになつた。

かうしても、まだ不幸は誠女の蓮月を追ひかけ、今は唯一の玉としてその手に殘つて居た、七歳の娘を奪ひ取つて了つた。そしてそこには眞に淋しき父子が殘された。父子相慰め合ふと言つても、父は老年である。蓮月は唯父西心への孝養がせめてもの務めで、そして生きて行く道でもあつた。その父西心も、天保八年齡七十八歳で、不幸な生涯の幕を閉ぢ、今は全く孤獨蓮月一人となつた。蓮月は毎日夜あけに庵を出て父の墓前に侍し、夕暮に山を下つた日が續いた。今迄はせめて父を悲しますまいと、頭も丸剃にするのを見合せ、薙ぎ下げの姿を保つて居たが、最早やその必要もないので、頭髮も剃り落し、墨染の衣淸き眞の尼の姿になつた。四十二歳の時である。

これから蓮月の眞の孤獨な生活が始まり、明治八年十二月十日、八十五歳でこの薄倖の一生は終を告げた。

尼となつた後の蓮月に就いてかくのは私の目的でないが、彼の女は名利を求めず、富貴を願はず、自詠の歌を書いた陶器を燒き、それを生活の資に充てゝ、他



に盡すこと厚く自らは乏しくつゝましく暮した。その歌が漸く世に知られて來てからも、少しも誇る所なく、その歌名を聞いて人が尋ねて來るのを寧ろ迷惑がり住所を數々變じ、勤王の志士達から慈母の如く敬はれ、慕はれたが、聊も表に立つこともなく、靜かに時勢の推移を見つめて居た。かうした尼蓮月故、或る人は寂光の人蓮月と言つて居る。

蓮月の前半生はあまりにも悲慘であつた。此の悲慘によく耐へて來たものだと思ふものは筆者のみではあるまい。これはその心が强かつたからだと思ふ。それと又感心させられるのは、その强き心を表面によく出さず、內に蓄へて居たことである。

蓮月のやうな境遇にあつては、その感情も疎く荒れるものである。それが素直であり、純美であつたことにも亦感心させられる。

これは勿論、尼の生れつきでもあつたらうが、彼の多難な不幸な境遇に碎けず

して、之を砥として自己を磨ぎ上げて來たからであらう。

私はこの蓮月に傳統日本婦人の美しさを認める。

誠女が夫望古の習癖を遂になほし得なかつた事は、妻として悲しかつた事と思ふ。責任を感じた事と思ふ。夫婦は一體故、互に對者を完成する責任がある。徒に對者の弱點を曝露し、指摘し、攻擊し、怨むべき筋のものではない。從て望古の放蕩無賴を遂に直し得なかつた事は、誠女として申譯ないと感じたであらう。さう感ずるが妻である。子供の父と言ふ以上、誠女には直に父の言葉に從ひ得ぬ心の苦惱があつたと思ふ。

然し遂に誠女は父の言に從つた。これは多少研究を要する。父に從ふか夫に從ふか。此の場合、日本の家なるものに就いて考へるを要する。家は小國家と言ふのが、日本の國體である。今は嫁は夫の嫁と言ふか、昔は家の嫁とさへ言つた。夫婦の結びは家を保つ爲めである。かうなれば、父が家に歸一して居、夫が家に歸一して居らぬ、誠女の場合は、父に從ふ外ないであらう。



誠女が尼となつたこと、これは當時の常識とも言へる。更に夫を持つ意志がないものゝ行く道とされて居たのだから、誠女もその道を歩いたのである。然し年齡はまだ三十三歳の若さである。父がどうしてもこの家を保つ爲めに、更に養子を迎へよと言はれたら、誠女の立場は苦しくなる。然し以前望古を去つて、古肥を迎へたのも、父の意志、家の爲めであつたとしたら、又古肥無き後にも養子を迎へねばならぬ。茲に誠女の苦しさがある。それ故誠女は豫め父の許しを得て、此の苦しみを未然に防いだのであらう。父も之を許した如く誠女のこの心には同情出來る。今なら、爾後一生獨身で暮すと言つた行き方の尼故、誠女が尼となつて國民離脱はして居らぬ。此の點に就いては批評する餘地もないと思ふ。

不幸の誠女であつた。然しよく筋を踏んで、清く美しく生きた誠女であつた。

# 野村望東尼

野村望東尼、名は「もと」福岡藩士浦野重右衛門勝幸の三女である。十七歳の時、同藩の林利貫に嫁したが、離縁になつて、二十四歳の時、更に同藩野村貞貫に再嫁し、安政六年七月彼女が五十四歳の時、夫貞貫に先だたれて得度し、向陵院招月望東禪尼と稱し、夫貞貫の志を承けて國事を憂へ、これより勤皇に勵んだ。

安政五年八月、朝野の志士が頻々と羅織されるに及んで、京都清水寺の僧月照も難を避けて、博多に來たので、望東尼は之を憐み、同志と共に密かに盡すところがあつた。



この時、福岡藩では、藩論不統一を來し、重臣加藤司書は月形洗藏、中村圓太平野國臣等とゝもに、勤皇を主張して、佐幕派に對したが、望東尼は常にこれらの庇護に努め、その山莊を志士の集合密議處に貸して居た。

望東尼が志士と交りを結ぶやうになつたのは、文久元年の上京が、大きい動機となつて居る。望東尼は、京都で親しく内裏の御有樣を拜し、胸のこみ上る思ひをし、それから以來、望東尼の心は内裏の御邊を離れ得なかつたのである。望東尼は京都に此の年の五月まで居た。此の間太田垣蓮月にも逢つたが、近衞家の老女村岡は當時、安政五年の大獄に坐して隱栖中の事とて、面會は許されなかつた。

文久二年春、同藩の平野國臣が討幕の策を廻らし、捕へられて獄に下された時望東尼は歌を以て之を慰撫したが、その翌年國臣が宥され、藩命で上京する時、望東尼はこれを山莊に迎へて激勵した。

平野が上京後、間もなく京都の政情に大變動が起り、長藩毛利慶親の建議で、

攘夷御親征の議が決せられ、大和行幸が仰出されて、在京志士は振ひ起つたが、忽ちにして會津薩摩の公武合體派の策動で八月の政變となり、長藩は退けられ、三條實美以下攘夷派七卿は西竄となつた。

前侍從中山忠光は同志を率ゐて大和に出發し此の政變を知らずに天誅組として兵を擧げたが、却つて幕兵の爲め討伐を受けて失敗に終つて了つた。平野は最初三條實美の內意で忠光等が行幸に先がけて急激に事を起さぬやう鎭撫に向つたがその時、忠光等は既に五條の代官所を襲擊した後であつたので、空しく政變後の京都へ歸つた。平野はその後間もなく天誅組に呼應して、生野に事を擧ぐる計畫を以て七卿の一人、澤宣嘉を奉じて生野に出發し、十月十二日未明、代官所を占領したが、此の時は既に天誅組の敗報が到着して居たので、同志間の步調が揃はず、十三日に澤宣嘉が本陣を脫出したので、平野は一黨を解散し、自分も脫出を企てたが、遂に豐岡藩の兵に捕へられ、後京都六角の獄で、近藤勇に刺された。

望東尼は平野の爲めに妻となる人を世話すべく、骨を折つた事さへもあり、こ



の平野の捕へられた事を山莊で知つて、死地に陷つた我が子に對する母親のやうに、苛立しい絕望を感じたらしい。

ものふの心のたけのささの原生野の名にもいきかへれかし

これはこの時の望東尼の詠である。

元治元年には、幕府が長州征伐に出たので、五卿は筑前に移ることになり、慶應元年正月には大宰府に移つたが、望東尼は五卿が筑前に居られる間に、時々拜謁の機會を與へられ、歌など獻じて居、望東尼六十の賀の祝には、五卿から歌を贈られたこともあつた。

福岡藩では、これより先幕府をはゞかつて、中村圓太、月形洗藏、江上英之進日高四郎等を罪し、小呂島、姫島等に流したが、望東尼は一方藩論の歸正に努め他方志士の解放に盡力した。

ものゝふの重荷の罪を身ひとつに負ひて輕くもなる命かな

「有志達の罪は、我れに負し給ひて、かの者どもは、まさかの御用にも立つべければ、御助けありたし」と罪を一身に着て同志の宥恕を請うた時の詠である。

平野國臣の後、望東尼が最も親しくした、中村圓太は、その後、同志の誤解を受けて詰腹を切らせられたが、望東尼は「なぜ老尼に一應相談なさゞりしぞ」と同志を難詰して居る。

京都の馬場文英によせた書信には、

「無理無法に腹切らせ候よし、この正月二十六日夜巳の刻過のことにて、唯人年三十一歳に相成候由に候……國元有志隋氣を奮勵いたさせ候積り、餘り膽略之爲に我命を沒し候事可憐の甚しき事に候。」

と深くこの事を遺憾にして居る。

元治元年長藩の高杉晉作が難を避けて博多へ來た時、望東尼は之を山莊に迎へ頗る慰藉につとめた。その後、晉作が俗論一掃の爲め奮起し、長藩に歸るに當つ



て、望東尼は自ら旅裝を整へてやつて居る。

自愧知君容我狂　山莊留我更多情　浮沈十年杞憂志　不若閑雲野鶴情

これは晉作が望東尼の志を謝して送つた詩である。

當時福岡藩は望東尼等の念願も空しく、佐幕黨が勢力を得て、國老黑田播磨等は幽閉され、加藤司書等は自刄し、月形洗藏等十四人は斬に處せられ、その他流刑に處せられたものが多數に上り、望東尼もこれに連座し、遂に慶應元年には姫島に流されるに至つた。

浮雲のかゝるもよしやものゝふの大和心の數に入りなば

これはこの大獄に坐し謹愼を命ぜられた時の詠である。

國の爲めこゝろつくしの武士の命にかはる我が身ともかな

これは浮浪人をその家にかくし、陰謀を密議させたのは、女子にあるまじき行爲だと、姫島に流された時の詠である。

女丈夫望東尼の面目躍如たるものがある。長藩高杉晉作は、望東尼が姫島へ流

されたのを知つて、同志と計り、密かに之を獄舍から救ひ出し、馬關の商人白石の家に請じ、往年の平尾山莊に於ける恩義に酬ひた。

望東尼は晋作の志を感謝すると共に、配流の同志を一日も早く助け度く、家人に次のやうな書を送つて居る。

「思ひもかけずひとやをのがれ出侍りぬ。いかにかたく〳〵の御耳を驚かしつらむとそれのみ思ひやり聞えしなむ。舟ものどかに渡りはて誠に〳〵谷梅ぬしをはじめあまたのかういにあづかり、わが身一人かくては本意ならず、いまは省をはじめ人やの苦をのがれ出るやうにのみたれ〳〵にもたのみ、其事のみこゝろをくだき侍るなり、みくにの御正義をひるがへし、有志等をたすくるまでのおのれが盡力なれば、いまは身もいとはずなむ……おのれいまのやどは名だかき白石正一郎かたなり、家内みな〳〵大正義にていとくらしよし、やがて谷梅ぬしが宅を山かげにしつらひかゝれるがやがて出來侍るを、そこにおのれをおくとのことなり誠に先年向ケ岡に、しばしものしたるが、いまのわが身のためとなり侍るぞかし。われのみならず國の御爲又諸有志のためともなるべし……。」



われのみならず、國の御爲又諸有志のためともなるべしの言は、まことに望東尼の信念の牢固たるを知り得るものである。

望東尼はこの後、三田尻荒瀨致知の家に移り、慶應三年十一月六日病歿した。年六十二である。遺著に、歌集「向陵集」「上京日記」「姫島日記」「夢かぞへ」等がある。

望東尼の死後、明治二十七年揖取素彦等が、三田尻に於ける望東尼の墳墓を重修して、その遺蹟を發揚せんとの擧あるや、時の皇后陛下昭憲皇太后の台聞に達し、金一封を下し賜はり、三條公、毛利公も、義金を醵出し、同年十一月盛な追悼祭が執り行はれた。

數ならぬこの身は苔にうもれても日本心のたねはくたさし

この氣慨あればこそ、皇事に盡したのである。

平らけき道うしなへる世の中をゆりあらためむ天地のわざ

安政二年十月二日夜の江戸大地震を聞き傳へてよんだ歌である。

なかなかに花は見えずて春の夜の夢にもかゝる異國の舟

異人の舟のよせきたる夢を見てと詞書がある。國を憂へては女の身も蠻船の寄せ來る夢を見たのである。

ものゝふの大和心をより合せすゑ一すぢの大綱にせよ

あの幕末雄藩が一致を缺き、相剋するを見て耐へ得なかつたのである。堂々たる當時の薩長の藩士も、勤皇女丈夫望東尼から見れば淺間しい相であつたらう。

かく述べて來れば、望東尼は或は日本女性としては脱線的な婦人のやうに聞える。何となれば、日本女性は一家の主婦とし、妻とし、母として生活し、行動するのを本格とするからである。だが詳にその傳記を見れば、此の勤皇生活、勤皇行動は夫の死後であり、家事や子女の教育を自らするの必要がなくなつてからであることに氣付くであらう。本來なら、よし勤皇の志があつくとも、それは婦人である。婦人の道を通じて此の志を表現すべきものである。然し望東尼の場合は



婦人ではあるが、前述の如く、直接勤皇に身を置くを許されたのである。そしてその行爲は勤皇と言つても、犬體は今日で云ふなら幇助的のものである。此の點は日本婦人がしつかり辨へぬと、嘗て明治時代に現れた如く家庭を顧みず、街頭に進出して參政權運動などするものが現れるであらう。

もと女の初婚がどうして破れたかはその實情を詳にせぬ故、何とも言へぬが、もと女の心からとは思へぬ。それは野村貞貫に嫁いだ後のもと女に見て察し得る。彼の女は、炊焚も灑掃も、裁縫も、刺繍も、琴曲までも何一つとして良妻とし、主婦として爲さぬことはなかつたからである。そしてよくその夫に仕へたからである。

野村貞貫には先妻松平氏に三男があつたが、もと女は之を生みの子同樣によく慈しみ、母として立派に成人せしめた。そして彼女にも四人の子はあつたのだが不幸にもこれは皆夭逝した。彼女はまた孫貞和、貞省等には、祖母として母にもまさる心遣をして居る。殊に貞和の足が不自由であつたのを憂へ、自分の帶をと

いて、ふさはしい具足のやうなものを作り縫ふなど、よそ目にも涙ぐましいものがあつた。

ともすれば君がみけしきそこなひて叱られし世ぞ今は戀しき

夫に叱られた過去の世が戀しいとは、夫が戀しい心からの聲である。何んとやさしい妻であらう。夫を偲んでは、涙に咽んだことであらう。望東尼は實に貞女であつた。

先立ちし君が清さに遅れ居て浮みながらにあるぞはかなき

「七とせあなたのこよいは、あるかなきかのけしきし給ふを見て、うべものかなしかりにしを、そのみあとだにこゝろまかせに、とぶらはむよしかなはねば、いともいともかしこきふかうにこそ、ただこしかたゆくすゑ、いとあじきなきよのまのゆめなりけり」と自記「夢かぞへ」にある。

望東尼は尼となつても、その夫を忘れることは出來なかつたのである。

花の浦の松の葉しろく置く霜と消ぬればあはれ一さかりかな



花の浦は、三田尻海岸、望東尼終焉の地である。望東尼はこゝで病の爲め世を去つたのである。

雲水に流れまどひて花の浦の初雪とわれふりて消ゆなり

置く霜、ふる初雪、淡く靜かに望東尼は消えて行つたのである。然し勤皇女流歌人野村望東尼の名は永く明治維新史に殘され、かしこくも正五位を追賜されたのである。

# 松尾多勢女

多勢女は、信州伊那の人竹村黨盈（つねみつ）の娘で、同國松尾淳齋の妻である。かねて尊皇の志厚く、野村望東尼と共に、幕末勤皇女流の双璧と稱せられた女傑である。

幼時の多勢女は、父母の膝下で讀書を學び、文政五年、十二歳の時、北原家に入塾して、讀書和歌を學んだ、朝夕はその家庭の人となつて、師の妻である人から嚴格な家庭的訓練を受けた。當時の紡績業は糸撚車によつて、毎夜婦女子の夜業として手紡してゐた。多勢女も毎夜よりこ綿一把を給へられ、一家の人達と共に、爐邊で木綿糸引きを日課としてゐたのである。かうした數年間を此所に送り文政十二年に、豪族の松尾家、松尾淳齋に嫁いで、天保元年に、長男誠。同九年



に盈仲、嘉永元年爲誠を、又女子四人を生んだ。後にこの子も、孫も世に盡さしめた。そして夫によく仕へ、舅姑によく仕へ、又先に立つて農業や機織の業を勵み、子を愛育し、多くの使用人をよく世話し、お茶を摘んだり、干柿を作つたりして、性來多病な夫を慰め乍ら、文政から文久の勤皇の爲に京都に出る迄、實に三十年間、貞淑賢德の良妻賢母として前半生を平靜に送つたのである。

それ故、勤皇攘夷と言つた國家的な覺醒が無かつたら、多勢女の奉國心は、かうした夫に仕へ、子を養育し、家業に勵むことによつて、現はされたに過ぎなかつたであらう。これが日本婦人の常道である。此の常道を正しく強く踏んで生きればよいのが日本婦人である。

然し平田篤胤の思想を享けた松尾一家に在つては、それが僻遠信州伊那谷に住んで居たとしても、心は常に國家皇室に繫がつて、夫の談話も時に必ずそれに及んだ事と思ふ。況んや伊那谷には、信濃宮も永く住まはれ、勤皇に勵んだ鄕土の人々の事蹟も傳へられて居るのである。

遂に松尾家に代り多勢女が挺身する時が來た。

文久二年である。在京の志士からは頻りに多勢女の上京を促して來た。夫淳齋の多病なことは志士も知つて居るし、又多勢女が男子に劣らぬ志のあることも知つて居るので、志士は多勢女に呼びかけたのであらう。淳齋はそれ故、その身に代り一刻も早く上京せよと多勢女に勸めた。勤皇の心に燃えて居た多勢女は、之によつて心を決し、家事を長男の嫁市岡氏に託して鄕里を立ち京都へ出たのである。

多勢女が如何に勤皇の志が篤かつたとしても、夫が勤めなかつたら恐らく上京しなかつたであらう。又よし勤めても、自分に代つて多病な夫を世話し、又家事を見る者がなかつたら上京を躊躇したであらう。良妻であり、賢母であり、良き主婦である多勢女としては、まさにさうあらうと思ふ。夫をそして家事を託し得る市岡氏のあつたことは多勢女の幸福であつた。

京都へ出た多勢女は岩倉家の客分として今の家庭教師のやうな仕事をし、岩倉



家を中心として集る勤皇家との間を斡旋した。かうして居る中に文久三年二月、角田忠行等同志九人が、暴雨を冒して薄暮等持院に闖入、足利三代の木像の首を刎ねて三條磧に梟した事件が起り、多勢女も幕吏に睨まれたが、危く長藩の士渡邊新三郎に助けられ、長州邸に入ることが出來た。

吹く風になびく尾花もうらがれてさびしくもあるか武藏野の原

長州侯に送つた歌である。

いその上ふりにし賀茂の神山にみゆきふりけるけふのたぬしさ

君と臣の道をたゞすの神垣にいでましの世となるぞうれしき

これは、孝明天皇の賀茂行幸を拜してよんだ歌である。攘夷討幕の時が近づいたのである。

然るに多勢女は、此の形勢を後に家鄕へ歸らねばならなかつた。夫淳齋の病氣がよくないとの報知をうけたからである。

ふるさとにかへるもをしき旅衣大内山に引かれ引かれて

多勢女は後髪を引かれる思ひで歸途に就いた。歸宅した多勢女は、こゝで良妻として日夜夫の看護に全力を注いでゐたが、志士の出入りが多く、長男誠は、その爲幕府の疑を蒙つて、捕へられ江戸へ送られた。夫は病床に、子は獄に、多勢女の悲痛はどんなであつたらう。その折も折、藤田小四郎、武田耕雲齋等が筑波山の圍を破つて、八百餘人上京する途を信濃に入り、諏訪、松本兩藩に支へられつゝある事を聞き込んで、捨て置けないとなし、急ぎ驅けつけて、大いに斡旋する所があつた。

その後、慶應三年大政奉還の事迫るや、多勢女は家事一切を親族に託して、男三人婿及孫等を連れて再び上京した。途上鏡山を過ぎて、

鏡山こゝろの雲も霽れにけり立ち返る世の面影を見て

かうして、大政奉還が行はれ、幕府征討となつたので、多勢女は長男誠を北陸道總督に、女婿北原信綱は副總督に、二男盈仲、三男爲誠を東山道總督に、夫々從隨させた。そして彼等に左の歌を送つた。



陸奥(みちのく)のうばら醜草うち拂ひ花の錦を身にまとひてよ

行きてはや歸り來てまし陸奥のなこその關に名のみとゞめて

母の忠節、多勢女はこゝで其子を通して忠節を盡した。こゝにはまた、夫淳齋の志をも貫かせた多勢女を認める。その男子全部と女婿までも從軍させた徹底ぶりには敬歎を禁じ得ぬ。かうしたことは實行容易ならざるものである。茲にも多勢女の烈々たる勤皇の心を見ることが出來る。幸にも長男以下全部其後無事凱旋した。

明治二年三月、車駕東京に移らせ給ふにあたり、多勢女はこの盛典を拜して後信濃に歸つた。多勢女の喜びはどんなであつたか。

多勢女、國事に奔走すること二十年。家產の大半は、國事のため傾け盡したので、歸鄉後は、家事の整理に全力を盡した。明治二十五年皇后陛下より白縮緬一疋を御下賜あらせられた。二十七年歿。年八十四である。

明治三十六年十一月、明治天皇が大演習御統監のため、播州の野に行幸あらせ

られた際、特旨を以て多勢女に正五位を賜はつた。

多勢女が家に歸つてからは、社會的な行動には出ず、田舍の家のお婆樣として地味な平凡な生活に淡如として其身を置いた。そしてよいおばあさん、偉いおばあさんと惜しまれて天壽を全ふしたのである。

多勢女の偉さ、それは何處までも日本婦人の道を踏んで光つたことである。そして、烈々たる勤皇愛國の志を遂げるにも亦此の日本婦人道に從つて居ることである。



# 乳母政岡

## 淨瑠璃、伽羅先代萩、千松の母

此の淨瑠璃は、德川四代將軍家綱の時、仙臺の城主伊達家に起つた御家騷動を天明五年、松貫四、高橋茂兵衞、吉田角丸が筆にしたもので、史實とは大部違つて居る。史實は、伊達政宗の家督を次子忠宗が嗣ぎ、更に之をその子綱宗が襲いだが、政宗の末子で、綱宗の叔父に當る兵部宗勝が野望を抱き綱宗を酒色に溺れしめ、それを口實に幕府に訴へ、綱宗を隱居せしめた。そしてその家督は綱宗の側室三澤初子の生んだ當時二歲の龜千代丸が繼ぐことになり、兵部宗勝、綱宗の兄、田村右京亮宗良が、幼君の後見となつて藩政を執つたが、宗勝は家老原田甲斐宗輔、小姓渡邊金兵衞義俊、目付今村善太夫等の奸曲の人々を採用した爲め奸

黨がはびこり、家督を狙ふ企ての噂が立ち、幼君の身邊頗る危險となつたのを三澤初子が懸命に之を擁護したと言ふのが眞實らしい。

伽羅千代萩は、時代を鎌倉期とし、龜千代を鶴千代とし、初子を鶴千代の乳母政岡とし此の政岡に、乳母とし、又その一子千松の母として、作者が抱いて居る理想を持たせて構成したものである。從つてこれによつてかゝる場合の乳母、かゝる場合の母として如何に行ずべきかの一種の解釋と見る時、頗る興味がある。

乳母政岡は、幼君鶴千代君の身邊の危きを知つて、之を病氣と僞り、濫りに他人を近づけず、朝夕の食事も他人手のものは一切斥け、自ら煮炊して進めねばならぬ情況から此の物語は頂點に達する。芝居では飯焚場がそれである。

「ヤイ乳母、ひもじいといふ事は強い武士の言はぬことゝ、常にそちが言うた故、おれは言はねど先刻から空腹になつたわやい」

頑是なき鶴千代は饑えに堪へきれず、かくせがむ。これが出羽奥州五十四郡の領主なのである。



「オ、お道理で御座ります。けふは思はぬ事ゆゑに御飯のこしらへも遲うなり、あなた樣にもさぞお待ち兼ね、千松も能う辛抱しやつた、もう拵へて上げます」

と政岡は立ち上る。

「のう乳母、こゝに在る此の御膳、食べるのは惡いかや」

「あゝもうし、そのお膳を上げるほどなれば、乳母も苦勞は致しませねど」

政岡はかう言つて、思はず獨語せざるを得なかつた。

「この程から怪しい事共、油斷のならぬこの時節、空腹なもお道理乍ら、御前のおこらへ遊ばす爲、吾子千松も四五日まへから、三度の食事もたつた一度……」

そして幼君を勵ます爲め我が子千松を褒めるのであつた。

「これ千松、そなたは言ふこと能うきいて何とも言はずに辛抱する。おゝ賢い〳〵強い〳〵強者じや」

ほめられた千松は、いさゝか得意のやうに、

「これ母さん、侍の子と云ふものは、ひもじい目をするが忠義ぢや、又たべる時は毒でも何

とも思はず御主のためには食ふものぢやと、言はしやつた故に、わしや何とも言はずに待つてゐる。その代り忠義をしてしまうたら、早う飯をくはしてや、それまでは明日までも何時迄もかうきつとすわつて、お膝に手をついて待つて居ります。お腹がすいてもひもじうない」

と澁面作り乍ら泣顔をかくすのである。

「さうぢや〳〵強者ぢや、千松は甚う強うなりやつたのう」

政岡の苦心は奏效し、鶴千代は千松に張り合ふ心が出た。

「いや千松よりおれが強い。やい政岡おれはちつとも空腹には無いぞよ、大名といふものは飯もなんにも食べずに斯うすわつて居るものぢや、のう乳母、おれは強者ぢや」

「これは又氣疎いことのう。さうお行儀なところを見ては、まだ〳〵千松などは、かなはぬ〳〵、おゝお強い〳〵、さうお強うてはコリヤ早う飯を上げずばなるまい」

政岡はいそ〳〵と飯焚きにかゝり釜戸の口を煽るのであつた。

「アレもう飯ぢや」



と幼君もよろこび、千松もよろこんで坐を立ち上る。

「もう上げますぞえ」

「母さん早う上げましてや」

「オ、上げませいで何とせう。今上げますほどに、まちつと煮え立つその間お氣に入りの雀の子、そこへ出してお慰み……」

と千松を促がして鶴千代君の對手をさせ、急き立つ子を叱り付けて、雀の歌などうたはせる。叱られて千松は、おろ〳〵と涙をしやくりながら、小さい手を打つて歌ふのであつた。

「こちの裏のちさの木に、ちさの木に、雀が三匹とまつて、とまつて、一羽の雀が云ふことにや〳〵、ゆふべ呼んだ花嫁御〳〵」

聲はしめり泣き聲なのである。

「アレ乳母、雀の親が子に何やら食はし居る。われもあの樣に早う飯が食べたい」

と鶴千代は小禽を羨むのである。

「母さん飯はまだかいの」

と千松もまたせがむ。そのうち漸う待ち兼ねた飯が出來て、一握りのそれを數の珍味と二人が悦び食べるのであつた。その時、

「梶原様の奥方お入り」

と呼ばはる聲に政岡はハテ心得ぬと千松を次へ追ひやる所へ梶原平三景時の奥方榮御前は夫の權威を背景にしづ〳〵と上座に直り、さて口上を述べるのであつた。

「自ら今日來りしは右大將の御上使、夫景時承れども、義綱の一子鶴千代病氣によつて、男たるものを禁じたると聞きし故、夫に代はる此の榮、義綱隱居の其の後、鶴千代の所勞殊に食事もすゝまぬよし、お心を付けられし此のお菓子、頼朝公より下され物、難有く頂戴あれ」

と持たせし菓子折をさし出し、否應言はさず食べさせる魂膽である。一味の渡會銀兵衛の妻八汐は、そのふたをおし開いて之を鶴千代の前へ差し出すので、さすが童の嬉しげに、鶴千代は立寄るのであつた。



「もうし御前様、又その様なさもしい事」

と遮ぎる政岡が言葉うち消し、

「やア頼朝公より下さるゝお菓子、何疑うて頂戴させぬ。是非この榮が食べさせる」

と、權柄づくに食べさせうとするを、此の時奥より千松が走り出て、

「その菓子欲しい」

と引つかんで、何の頑是もたゞ一口に食べて了ふ。八汐は驚いて、かくてはその毒の企みも露顯必定と、千松の首筋引きよせて懐劍をぐつとその小さい胸に突込んだので、千松はわつと一聲七轉八倒する。榮御前は憎さげに、

「何をさわ〳〵騒ぐことはないわいの、忝けなくも頼朝公より下されし此の折、ふみ破りしは上への無禮、小さい餓鬼でも、その儘にはさし置かれぬ。それ故に手にかけたは、お家の爲を思ふ八汐の忠節……」

と、現在母の政岡が前に、その子千松がなぶり殺しにされるのをほくそ笑えみつゝ見て居たが、政岡は肝にこたへる辛らさ無念さも、我が君故とじつとこらへ

て涙一滴も目にもたぬのであつた。

榮御前は始終政岡が、素振に氣を付けて居たが、あまり冷靜なので、さては矢張りさうであつたかと早合點をして口を開いた。

「オ、でかした八汐、右大將より鶴千代へ下さるゝ大切の御菓子、小せがれめが出しやばつて、すんでの事に大事の工、イヤ、アノ大事の菓子を荒した科、殺したは八汐が働き、さすが渡會銀兵衛が妻程有る。政岡には自が、云ひ聞かす事も有り、沖の井八汐兩人は暫く次へ間を隔て、遠慮召され」

と言ふので、八汐も沖の井も奥の間へ遠慮する。それをまつて、榮御前が政岡の傍へよつて、さも解つたやうな口をきくのである。

「年頃仕込みしそなたの願望、成就して嘸ぞ悦び」

これは政岡には全く意外の言葉である。

「エ、何とおつしやる」

「ア、イヤ、モ隱すには及ばぬ、東西分かぬ内よりも、取替へ置きしそなたの子の鶴千代が



身に恙なう、義綱の誠の倅千松が此最後、嘸本望であらうなう」

「エ、」

「オ、取替子の樣子は先達つて知つたれども、若しやと思ひ最前から、窺うて見る所、血筋の子の苦しみを、何ぼ氣强い親々でも堪へらるゝ物ぢやない。若殿にして置く我子が大事、そなたの顏色變らぬは、取替子に相違は無い。スリヤ皆心は同腹中、刑部殿とも內談しめ、諸事我夫の指圖有らん、先今日は立歸り、病氣の樣子申上げん、必ず〳〵何事も、人に覺られまいぞや」

と一人呑込んで悠々と、館をさして歸つて行つた。

「跡には一人政岡が、奥口親ひ〳〵て、我子の死骸抱き上げ、こたへ〳〵悲しさを、一度にわつと溜涙、せき入りせき上げ歎きしが、

『コレ千松、よう死んでくれた、出かしたな〳〵。そなたが命捨てたゆゑ、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、已が工を打明けしは、親子の者が忠心を、神や佛も憫みて、鶴千代君の御武運を、守らせ給ふかハ、、、有難や、有難や。是と言ふのも此の母が、常々敎へて置いた事、稚心に聞分けて、手詰に成つた毒害を、よう試みてたもつたなう、オ、出

かしやつた〳〵。そなたの命は出羽奥州、五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさす、誠に國の礎ぞや』」

かう言つて吾が子を褒めた。だがそこに死んで居るのは可愛い一子千松である。母、その母が君の大事の場合、死ねと敎へた。その通り千松は死んだのである。愚痴も出るのが當然であらう。男勝りの政岡も女以外のものではない。

「とは云ふものゝ可愛やな、君の御爲豫てより、覺悟は極めて居ながらも、せめて人らしい者の手に懸つても死ぬ事か、素姓賤しい銀兵衛が、女房連の劍に掛り、なぶり殺しを現在に傍に見て居る母が氣は、どの樣にあらうどうあらう。思ひ廻せば此程から、唄うた歌に千松が、七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬと、歌の中なる千松は、待つかひ有て父母に、顏をば見せる事もあろ。同じ名の付く千松の、そなたは百年待つたとて、千年萬年待つたとて、何の便があろぞいの。三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物、喰うなと云うて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ樣な、胴欲非道な母親が、復と一人ある物か。武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや、死ぬるを忠義といふ事は何時の世からの習はしぞ。」



政岡の凝固まつた鐵石心も、こゝではゆるまざるを得ぬ。そして人目もないことによつて、前後も不覺に吾子千松の死體にひつしと抱きついて泣き入るのであつた。そして幼君鶴千代も、われに代つて千松が死んだことを悼み、千松に感謝するのである。

此の淨瑠璃の政岡はたしかに日本の女性として美しい。乳母として君を直接守護した以上に、まだ幼きわが兒に臣としてよく忠節を盡さしめた。

胴欲非道な母親と政岡は言つて居るが、單にその兒に死ねと言ふなら、胴欲非道とも言へやうが、主君の命に代つて死なした事は胴欲非道ではない。寧ろ臣の行く道を歩ませた母親の慈悲と言つてもよい。武士の母は悲しいと言へば言へる。然し千松を大きく君主に活き得しめだことも母なればこそ出來たのである。

日本の强さは、よろこんでその子を君に捧げる母があるからである。私の悲しさを押し切る母があるからである。

大東亞戰に於てはかうした日本の尊き母が戰勝を得しめ、日本の光を世界に輝

かしめて居る。私は政岡の如き母を謳歌するものである。政岡は理に於ても日本の母であり、情に於ても日本の母であつた。



# 附

# 錄

# 日本戀愛觀

日本の國體を哲學的な色合で見た場合ならば、私はこれを一體觀に立つてゐるといひ、歴史的な見方で見た場合に於ては、君民同祖、國民同胞といひ、それから道義といふか道德といふかしらぬが、さういふ見方をすれば愛の凝結國家と、かういふ風に考へて居る。その愛の凝結國家といふ根本の國體そのものが、やはりずつと日本人を今日までも貫いて居るので、もしこの貫きを失つた愛なり、戀愛といふものが發生し、もしくは存在するとしたら、それは西洋的な愛であり、戀愛である。從つてそこに功利的な、方法論的な戀愛といふものが生れるので、本來の日本人の愛、或は戀愛といふものには、さういふものは絶對になく、むし

ろ國體的なものであるのではないか。故にこの日本人の愛といふものを、ほんとうに研究することが、やはり國體といふものをほんとうに深く探るといふことになる。從つて國體に徹するといふことは同時に日本人の愛に徹するといふことでこの問題は人が言葉の卑らしさに囚はれて、忌避してゐるかもしれないが、現代に於て、ほんとうに研究し、徹底させる必要があるのみならず、日本國家の中のみでなく、將來大東亞共榮圈といふやうな問題を取上げても、やはり徒らなる西洋的愛を以て彼等を妥協的に率ゐて行くといふやうな考へを出したら、禍根を將來に殘して行くと思ふ。

日本婦人の本質といふものは、やはり偉大なものに沒入する心を持つてゐると思ふのである。そこで偉大といふものゝ性格を檢討すれば外國的なものと日本的なものとの差が生れると思ふのであるが、若さの至り、情熱のほとばしりといふやうなものから、過去には西洋人に偉大さを認めたと思ふのである。これは日本



の全部がさうであつたやうである。即ち西洋文化崇拜、西洋學問崇拜、すべて外人に依賴性を求めて、日本が及ばない、足らない、貧弱だといふやうなところから、日本が扛つて來、濁つて來たと同じやうに、若き婦人あたりが、見た眼でも交際をしてみても、金遣ひの上からみても、日本に來てゐるぐらゐな過去の外人は、或る意味に於ての偉大さを彼等少女に與へてゐた。そこへもつて來て、唯物的な見方が非常に強くなつて來た爲に、外人の偉大さがその方面で少女に認識されて、そこに過ちが生れてゐるのではないか。それは某大學へ講演に行つた時に知つたのであるが、某國の留學生が非常に日本少女の戀愛對象になつてゐるのである。不思議に思つて調べたところが、日本に來てゐるぐらゐのものだから、日本の學生より金遣ひが非常にきれいな上、いづれも辭令にたくみで、交際が上手である。そこへもつて來て、日本の少女の父兄にも、彼らの父兄にも暴露しない條件が備はつてゐる。その三つからその學校で醜名を流すのは必ず留學生で、さうしてそれはみんな男女關係であつた。そこで日本の女の家庭を調べて見ると、

案外良家の娘であつた。さうしてこの良家の娘が彼らと知合になることを誇りとして、お互ひにお友達を世話し合つて居た。その世話し合ふ心理は、自分が暴露した際に、友達もゐるといふことによつて、自己擁護をするわけである。なかなか技巧的である。それはたま〳〵留學生に現れた現象であるが、過去の西洋人に對する日本女性も、大體さういふ傾向をもづてゐるのではなかつたかと思ふのである。それから親もまた外人なり、さういふ方面の人を崇拜してゐる爲に、その外人と交際してゐるといふ娘に、別に自己を辱しめてゐるといふことを感じない。それとあべこべに、東亞の留學生に對しては、親が憐憫の情をもつといふか喜んで家庭へ入れてゐる。いひかへて見ると、娘と醜關係をもつた者を親がうちに呼んで御馳走してゐる。さういふ滑稽な現象を、私は證據を掴んでゐる。であるから非常に檢討しなければいけないので、結局はやはり僞文化、或は愛の認識の不足といふか、日本人の心をもつて、個人主義國家の人間を同樣と考へて扱つてゐるといふ美點すなはち弱點、美しいことが弱點になつてゐるといふ弱點方面



だと思ふ。本質的なものは、或はやはり美しい日本人の愛といふものから出てゐるかもしれぬが、その美しさを向ける對象が惡いことゝ、環境が濁つてゐるといふことで、可哀想に彼女等をして常軌を逸せしめるといふ結果に落ちて、呪はれる部分が生じてゐるのである。

われ〳〵は戀愛を論ずる際に、まづ範圍を決めてかゝらなければいかぬ。といふのは、日本の青年男女の間の戀愛といふものだけを戀愛といつて論ずるのか、さういふことでなしに、廣く戀愛といつて論ずるか、近代の戀愛といふものは、未婚者間に於けるもの、もしくは他の動物本能的な欲求を當然含んでゐる如き意思をもつて戀愛といふものを見るのか、そこらも本質的に突きつめないと、われ〳〵には戀愛を論ずる價値なしといはれても仕方がない。

私は、「萬集のこゝろ」に戀愛論を盛んに書いてゐる。ところが某女學校を出た婦人が、先生あの戀愛論は駄目です、あゝいふことをいつたつて、近代の娘さん

には通じません、といふ批評を受けたのである。それは極く親しい婦人であるが私が然らば近代の戀愛といふのはどういふものかといつたところが、それは甚だ私には腑に落ちないものだつたけれど、要するにわれ〳〵の考へてゐる戀愛よりは非常に低級な内容に向つて戀愛といふ言葉を使つてゐるのである。であるから戀愛といふ題で書いても、私どものいふことが非常識でなく、高いものだが、それが何かにうといといふ批評を受けないとも限らぬのである。それをその儘承認するかどうかは別問題であるが、その觀念から私は改めて行かねば、抂げられて來た戀愛觀といふものゝ淨化は出來ぬと思ふのである。やはりその某女性のいつた如く、いまの戀愛といふ言葉がわれ〳〵の考へてゐる内容と違ふものがあるのではないか。

私は「戀」といふ字が日本の古典でいつから使はれたかといふことを調べてみると、古事記に、八千矛神が奴奈川比賣命をお訪ねして行つたときの歌に對する



比賣の歌の中に出て來るのである。それが私の知つた範圍では一番古いのである。それは要するに支那文字を當てたわけであるが、當時の記錄者が、それを最も適當と思つて當てたと思ふのである。それでやはり當時の學者なり、それを使つた人の支那語知識といふものを調べなければ戀の内容がわからない。而もそれは萬葉時代以前の戀でなければいかぬから支那の文献を漁つて見ると、これも決して現在のやうな戀でなく、君臣關係にも使つて居れば、朋友關係にも「戀」の字を使つてゐるのである。それでやはり延いて男女關係に使つて居り、而もそれは或る意味の内容をもつた戀愛ではなく、萬葉集は明瞭に某婦人が　天子樣に、「戀」といふ字を使つて心持を表現してゐ、山上憶良の如きは、自分の子供に「戀」といふ字を使つて、心持を表現してゐる。また朋友に「戀」といふ字を使つたのがある。「戀」といふ字は今の日本で使つてゐる「月を戀ふ」「自然を戀ふ」といつたやうな風で、別に狹い意味の字でなかつたといふことだけは確かである。さうして所謂變な臭ひのない、情熱的な心持であつたといふことも明瞭であると思

ふ。それならば要するに愛なるものゝ濃厚な時に「戀」といふものを使つただけだと私は思ふ。だから男に向つても女に向つても、上下左右、友達でも愛の濃度をたゞ表現したゞけで、所謂惡臭は放つて居らぬと私は解釋してゐるのである。

戀愛といふものは「一體完成」の念願である。そうして君とか親といふものに對しては、もう既に一體的な立場が自ら認識されるが。……一體的といふといけないなら、歸一沒入の心があるわけである。大抵の人は……。ところが赤の他人である方面に於ては、同じ日本人同士でもやはり相對的にあるものが一體になるを念願する場合、親に對する場合よりも餘計强度を增さないと、一體念願といふことに到達しないから、そこで男女關係といふものゝ相對的な場合に於て、最も歸一沒入の濃度が强く心に燃えて、その强さといふものが代表して、男女關係の戀愛といふものを認識するけれども、もと〳〵本然的なものはやはり一體になつて、自己の生命を擴大して行く。向うを大きくするなり、こちらを大きくす



るなり、兩者大きくなつて行くといふのが日本人の本質的な戀愛である。さうしてやはり男女關係に於ても根本的に、さういふ心持で、最初は容貌とか、世才とか印象的なものが物をいふが、漸次本質的な、精神的な方面に日本人は入つて行くのではないか。入らない人間は外人化してゐる人間だ。日本人なら必ず最後に本質的なもので、形骸の醜美とか、金錢の多寡といふものは拂拭してしまふといふ美しさを、やはり現在でも持つてゐるのではないか。かういふ點を大いに買つて、近代女性といふものに自己を失はせないといふことが、われ〳〵の希望であるし、彼等としてもやはり希望してゐるのではないかと思ふのである。それはやはり大東亞戰が開かれてから、戀愛對象といふものが、調べて見るとよほど違つて來てゐる。婦人側、もしくは親から出る結婚條件がこれは大政翼贊會あたりの喜ぶ傾向に傾向づけられてゐる。これはいゝ傾向で、やはり腕のある男とか、健康な男とか、功利的な見方といへば功利的な見方であるが、要するに本質的な日本男子といふやうなものに認識が行つてゐる。昔のやうに姑のゐる家庭は御免蒙

むるとか、二人で新家庭を結びたいとか、それからお父さんが年寄で、すぐ死んで財産を二人で勝手に動かしてみたいとかいふやうな、妙な外人的な考へははゞかつて表に出さぬのか、それはわからぬが、事實調べて見ると好ましい方向に婦人の頭が行つてゐるやうに思ふ。さうするとやはりそれを通してみた現代婦人の戀愛といふものも、われ〳〵がこゝで槍玉に上げるほどのものでない。馬鹿にしなさんな、といふやうな考へ方が、必ず少女にもあるのではないかと思ふ。

私はさきに愛の凝結國家と言つた。つまり日本を說かんとすれば歷史に於て說かなければ說けない。畏れ多いことだが、國民は　天子樣に對して戀愛を超越して信仰になつてゐる。戀愛などといふ言葉はいやであるならば使はないでもいゝのだが、かりに萬葉集がさういふ言葉を使つてゐるから言ふのであるが、われわれは　天子樣に對して命を差上げる。これ程愛の極致はないわけである。また親に對しても夫に對しても愛の極致國家である。戀愛といふものを度外視しては日



本の國體も分らなければ、國家も論ぜられない。古事記が戀愛といふことに對して何らの臭味もなく、平然と公々然とあれを實に朗かに書いてゐる所以が私共には領けるのである。さういふ意味から言つて近來の濁つた戀愛觀から古事記をみて、かういふところは除かなければ中學の生徒には敎へられない。女學校では敎へられぬといふ、觀念の方が濁つてゐる。あのほんたうの戀愛といふものを說き明かさなければ日本の國の强さ、國民の强さを說いても、その根抵を養ひ得ない。極端に言へばさういふことになる。それは母性愛などと言つて、子供にお母さんがあれだけのものを叩き込むといふのは愛の强さであるから、結局愛の强さにかなふものはない。義理とか人情とか言ふ、さうした理知的なものを超越したものである。

日本の妻は夫にとげこむ、それ故名前さへ出ぬことになる。楠木正行の母の如き、創作家は久子などといふ名前を付けたが、そんな文獻はどこにあるか。一般

にはさういふことは知られずに、正成の妻、正行の母と云ふ名で通つてゐる。

やはり婦人は夫に歸一するか、家に沒入するか、要するに家に生き夫に生きる或は子供に生きると云ふことになる。即ち夫が名乘つてくれさへすれば奥さんは實際はどうでもいゝのである。現代で云へば東條總理夫人でいゝと思ふ。だから僕は何々女史と云ふ名前を嫌ふ。女史などといふのは「たをやめぶり」ではない。たをやめぶりの方が奥床しい。

日本的な戀愛といふものは倫理道德感を超越してゐると言ふと叱られるが、私はさういひたいのである。それを德川の末期あたりに、孔夫子といふか、あゝいふ支那の倫理道德觀が入つて來て、直ちに本質的な日本的戀愛を倫理道德の範疇に入れてしまつた。さうしてその秤で決算をしたのではないか。だからあの時代の批評は、もう一度檢討しなければいけないと思ふ。



私の持論から言ふと、日本の國は愛の凝結國家だといふことを本質と考へてゐるので、愛情を育てるといふことは即ち國體を生活方面に實現するもので、いかなる時局下であつても、この愛の重大性はどこまでも考へなければなるまいと思ふ。殊に戰時下に於ける弊害方面としては、動もすれば人心がすさむといふやうなこと、溫さがなくなるといふこと、或は粗暴になり易い時に於て、廣い意味の愛といふものが特に男女間に釀されなければならないのではないか。ほんたうに國民が強いといふことは、愛情が極めて強いことであると思ふ。そこで眞の日本の本質的な戀愛といふものがこの際日本男女によく認識され、さうして所謂外國的な戀愛の觀念を拂拭して、各々眞日本男女といふ立場で行はれる戀愛は、一方に於て男を强からしめ、一方に於て女をやさしからしめる。かういふ意味で戀愛翼賛なる言葉を曾て使用したことがある。その意味は、假にドイツでヒットラーのやうな人にドイツの全婦人が戀愛を感ずるといふことになつたら、その場合に於てのヒットラーは非常な强さを覺えるであらう。イタリーのムツソリーニにし

ても同様だ。そこで日本の眞の女性が或る一つの理想的戀愛對象を設けて、さういふ男子に戀愛をするといふくらゐな心になれば、その求めるといふやうな男子が日本に生れるだらう。また男子としても俺は眞に斯の如き女性が欲しい、それなら戀愛をするといふことになつたならば、そこにやはりほんたうに立派な婦人が日本に出て來るだらう。だから私の希望する戀愛は、眞女性となつて眞男子に戀をせよ、眞男子となつて眞女性に戀せよ、そのほかの下らない戀に振向くなといふ風にありたい。さうしたら恐らく希望のやうな男女性が日本の國に生れて、眞の翼賛を顯現し得るだらう。時局はこの後何年續くか分らない。さうすれば、今の少女は戀愛などといふことには無關心かも知れぬが、必ず結婚期も發生するのであるから、この戀愛といふことについて十分に考へねばならぬではないか。又大に自覺しなければならぬではないか。

だが自覺々々といつて、自覺を促すばかりでは發生しないかも知れない。是に於てか、やはり國家がさういふ雰圍氣の下に包纏することが必要であらうと思



ふ。かういふ時局に戀愛は……といふやうなことで、これを抛棄することは、國家として將來悔いを生じないとも限らない。故にこういふ時期に於てこそ戀愛問題あたりは取扱はるべきものであると思ふ。

# 傳統と婦道

私は、傳統に還れといふことを避けてゐるのである。といふのは、今は本筋の傳統といふものが認識されぬやうに思ふからである。抽象的、概念的には傳統傳統と言ふけれども、然し、どういふ傳統を持つて來たと言はれた時に、抽象的には何かいひ得るが、摑んで或物を出せといはれると、一寸困るのである。それでもう一度根本的に日本精神を再檢討し、再出發して、そして現代に生きて行くのに、何如に、これが消化されて行くかといふことを、各自がよく、自己を凝視しつゝ摑み、又指導者も、さういふ指導をし、その方面に漸次、建設を進めて行く方が、寧ろ、純眞にして、生一本で、現代婦人としても非常に摑みいゝのではな



いかといふ氣がするのである。再出發的に行くと、筋がよく立つて、しかも現代婦人に、創作的な面を與へるやうな氣がする。そして却つて誇りを感じさせる。また、希望を持たせ得るやうな氣がするといふ所から、單統なる傳統に還れといふ言葉は、やはり、嘗て萬葉に還れといつたやうな言葉と同じで、實に何といふか、通り言葉とでもいふか、概念的なもので、本當に現代の婦人を考へた場合には不親切な言葉である。もう少し本格的に筋を通してやり、信念づけたもので指導し、本人にも信念を與へなければならぬと私は考へる。

その意味で萬葉といふものから、婦人の道を、假りに發見するにしても、前提としては、やはり等しく男女の別を除いて、その當時における日本人の持つて居つたものは、どういふものであるかといふことを先づ調べて、そして日本精神に基づき、その時における婦人の立場如何といふものを探し、その探したものを考慮して、これを現代に結びつけたらどうか。

萬葉の中に人麿が、天皇にお供して吉野へ行つて詠んだ名高い歌がある。その歌の中に「山川もよりて奉つれる神の代かも」といふ言葉がある。人麿の生きてゐたその時代を、人麿は直ちに、神の御代と直感し、さう歌つて感激してゐる歌である。この思想は、現代即ち神代といふ思想であるから、今の我々も、神代に住んでゐるといふことであり、現代が即ち神代だといふ所から、男も女も、母も妻も、悉くさういふ意味の神代で、その神代の中の一人、即ち神である。そこに自己を建設して行かなければいかぬ。かういふ所から、現代に續いた所の神代のこれが本當の、いふならば傳統だと思ふ。傳統といふ中には、先程も出たやうな繼承した前期の雜然たるものまでを傳統といふ風に誤解して、非常に不純なもの濁つたもの、若くは誤まられた思想によつて發現されたものまでも、その後において傳はつて來てゐると、それを傳統だといふ風に考へられ、私の前にいつたものとは違つたものになる關係上、私がさういふ言葉を避けたいといつた譯である。



私に言はせると、日本は愛の凝結國家であり、一體觀に立つ國家であり、歴史からいふと、君民同祖の國家である。即ち心持からいつたら、愛の凝結國家であるから、純眞な、寧ろ、一體觀的な考へから產れた愛で、そこに差別を認めない。從つて愛を超越してゐることは明瞭だけれども、この內容を分析すると、そこに愛に、敬に、慈と、この三つを一つにしたものに認めてゐるのである。それであるから、愛そのものを呪ふといふことになると、國體的なものから非常な問題が起るのではないかと思ふ。

外國の「ラブ」「リーブ」などを譯して國字愛を宛てゝあるが、あの愛はともかく日本で愛といふ字の用ゐられて居るのは、古事記に伊耶那岐命、伊耶那美命が天之御柱を行き廻り逢ひました時、伊耶那美命が先づ「阿那邇夜志愛袁登古袁」と言ひたまひ、後に伊耶那岐命が「阿那邇夜志愛袁登賣袁」と言はれたと、この愛字を用ひてある。日本書紀はこの「えをとめ」、「えをとこ」に可愛少女、可愛少男の字を宛てゝある。面白いことには日本書紀の他の一書にはこの「えをとめ」

に美少女、「えをとこ」に善少男の字の宛てゝあることである。そして又古事記日本紀は、此の愛字を「うつくしき」とか「うるはしき」とかよませて居る。日本の愛の内容がこれでも外國の愛よりずつと深いものであることが知られるやうに思ふ。

私は「床しさ」こそ日本の根本的な、外國人にないものと思ふ。この言葉は徳川時代の文學に出てくる「わび」「さび」でいひ現せる。この「わび」「さび」を私は自己流に解釋して「さび」は「澄」、「わび」は「詫」に通ずる心持だと思つてゐる。それで、わびはつまり自己生成の道といふことである。これを平たくいへば、内にある自己の心を責めつゝ自己を建設して行く謙虚な氣持である。即ちこれを今の言葉でいふならば「自己反省」であり「自己檢討」であらう。その氣特は表面に現すといふやうな皮相的な、概念的なものでなく、惟神の道から日本人の本質的なものである。そしてこれはたゞ獨り婦人のみならず、男子にも尊く



保存されてゐるところのもので、これを失へば日本人の外國人と違ふところの主なるものはなくなつてしまふのである。即ち、たゞ徒らに他に要求する、他を責める、他から奪ふ、なんらの自己反省も自己檢討もないのがいはゆる亞米利加思想といふものである。「愛」といふ言葉もさういふ意味における表現で、たゞ徒らに求め奪ふ意味の表現の「愛」そのものは反日本精神的なものゝ外何ものでもないと考へる。從つて、日本の婦人が絶えず自己といふものをあるものゝ中に沒入させ、歸一して天と仰ぐものに自己を生かして行くことに滿足出來る。そこが日本婦人たる所以ではないかと思ふのである。即ち、忠臣の母は忠臣の出たことによつて自分が如何に認められなくてもそれで滿足出來る。孝子の母は孝子の出たことによつて獨りで喜びを感ずる。夫が軍神と仰がれてもその妻は自分が世に出されることを勿體ないと思ふ。かういふ婦人の謙虚なる氣持がひいて　天皇に歸一し奉るといふ精神に結びつくことによつて、その「床しさ」は一層堅固に保持されてゆく。これが日本婦人の根本的なものではなからうか。

しかし、女に天とするものがあると同時に、男の方にも天とするものがあると勿論である。即ち、男性がほんたうに「天皇」に歸一し奉る。その時はこれを男性といはず夫といはず、女性はこれを天と仰ぐことが出來ると思ふ。

今日の御代における女性はどうか。夫を天として仰ぐこと。それが天皇歸一への道である。夫をして天皇に歸一させることが　天皇へ歸一し奉る道である。さういふ時代に生れ合せてゐるのである。それで私は現代女性の一切の惱みは解決出來るのではないかと考へる。探しても求めてもなか〳〵得られない大きなものそれが婦人の本質的な、なんともいへない使命的なもので、夫を、子をその方向へ動かすといふことは理窟以上である。その力を惠まれた日本の女性が男を動かし得ないとでもいふならそれはまだ日本の眞の女性ではない。實際、私は男子の建設といふのは婦人の力だといふ位に考へてゐる。

私は最近かういふ歌を詠んだ。「よき母はよき子を產めり、よき母はよき少女なり少女たうとし」即ちをとめといふものは實に尊いものだ。といふことは日本



建設の根本は女性であるのだといふことを男性に自覺せしめ、且女性に向つてその矜りと自己の立場といふものをほんとうに認識して貰ひたい、かういふ意味において詠んだものである。少女は尊いといふことは同時に婦人は尊いといふことである。全く婦人の動き方、生活の仕方、働き方一つで一男子は勿論のこと、一國の興亡さへ左右する結果ともなるのである。昔から傾城傾國といふ言葉さへある。ほんたうに目覺めた婦人であつたならば、男が女を育てる力よりさういふ婦人が男を育てる力の方が遙かに大きい場合があるのである。そこで、女性の立場使命といふものは今まで言つた通り極めて明瞭である。

それでは女性の自己建設といふ上においてはどうすればよいか、これは先づ依存生義を捨てるといふことである。そして自己の本分を盡すことによつて力强き生活、力强き歩みを續けて行かねばならぬと思ふ。世の女性指導者といふものはすべてこゝに重點をおいて行かねばならぬと思ふ。依存主義を捨て新なる世界觀を持し、新なる日本觀、人生觀を持つて進むといふことが今日の女性に最も要求

されてゐることではないかと思ふのである。

つまり夫への歸一といふことは、歸一觀の上において見た場合で、一體觀に立つた夫妻の對立では妻は妻として、夫は夫として、女は女として、男は男として自らを磨いて行かねばならぬ。即ちその分擔の上において女として男に優るものを持つてゐるはずである。その女の持つべきものは女で持てといふのが依存主義を捨てろといふ私の解釋である。



# 日本女性の新しき生活構想

今までの日本の社會の文化、教養の多くは日本的なものを眼中に置かずに無檢討に集積された、それがやはり今日のインテリ婦人の狀態ではないか。ところが總ての方面に於て、眼覺めない者がこの際はおいてきぼりを喰つて行く過程にあると思ふ。單なる一時的のものや御時世なら胡麻化して、またの時機を待つといふこともあるであらうが、世界觀の上から、再びさういふ時代をあらしめてはならず、日本的なもので押切ることに、國家が肚を決め、國民も肚を決めなければならない時機で、この際、昭和維新をどの階級にも斷行しなければいけないと思ふのである。今までのアメリカなりイギリスなりの文化は高いといつて、それを

そのまゝ持つて來たといふのは、謂はゞ仲賣的な人で日本人ではない。だから若しその文化をうまく攝つて本當の日本人になつてをつた上流婦人なら、この際そんな必要はないが、やはり牛乳を飲んで牛になつてをる傾きがあるならば、その點だけはどうしても茲に自己檢討もし、又反省もして、新しい生き方を速かに生み出す方が、自分でも苦痛もなし、生活も樂になると思ふ。要するに婦人が今まで世界觀がなしに、日本觀がなしに、人世觀といふものがなしに、漫然と日本婦人といふものは男に追從して行くものだとか、或は大きなことは男がやるのだから女は―といつたやうなことで、何處へ出しても一かどの日本婦人だといふ見識がなかつたのではないか、そしてその見識といふことを誤つて、男性と平等の知識なり、平等の活動なりが出來る者が婦人の最高希望だといふ風に考へ、最高の教養なり最高の建設をして、而して死ぬ所にパッと死に得る日本婦人といふ點が足らなかつたのではないか。だから教養も、意氣も、それを自己に貯へてそれを日本婦人として活かして行く方法を知らなかつたと思ふのである。



自己を建設した婦人が、家のため自分を殺し、死んで家に大きく生き、妻としては夫に大きく生き、母としては子に大きく生きて行く。この大きく生きる爲の死に方を知らない。さうして家を通さず家に生きずに、家を放つて置いて、街頭に出るなり社會に出る。夫をそつち除けにして置いて自分が光つて行く、子供を教育して子供を通して生きることを考へずに、母たることを忘れて、他の方面に於て光らうとする。だが日本はさういふ婦道といふものが認容出來ない國體だと私は信じてゐるのである。鹿兒島の武道教育の婦人訓には、やはり妻は夫につき母は子の爲に自分を殺す。さうして忠を夫にさせ、子にさせる事が、妻の忠であり、母の忠であるぞと明瞭に教へてゐるのである。これは今も言へることで、本當に夫を君に捧げ得るやうに働かせる妻は、國家の尊ぶべき忠義な妻であり、又子をさういふ風に育てゝ行つて、國家のお役に立てる母が、本當の忠義の母である。遊離して母や妻が婦人といふ形で、徒らに國家にのそ〳〵と出て行くといふ形は日本本來の婦人の形ではない。若し妻だ夫だといふことを言はずに、婦人と

いふことで言つたら、家といふものに婦人は隠れるといつたらいゝか、死ぬと言つたらいゝか、要するに婦人は家の最高支持者である。家の最高支持者は同時に私は日本精神の護持者であるといつてゐるのである。殊に母、妻といふものは日本精神の護持者として高く評價してゐるのである。

國家はもつと清々しくなければならないのである。目標を明朗に示して、これだ、それ以上は間違ひだ、俺について來いといふ位に清々しくやれば、男性も更に清々しくなるのである。國家がもう少し清々しく、もつと澄まなければいけない。男性は本當の男性に澄み、女性は本當の女性に澄む。これが日本の言葉のさびといふことである。神さび、をとめさび、翁さび、といふ如く、神は神として本格的に、男は男として本格的に、女は女として本格的に澄んで行くことになればよいと思ふ。然し今までの國家が清々しくなれなかつたといふことも認めてやらなくてはなるまい。總てが二股膏藥式な生き方でなければ世界に生きられなか



つたかも知れないのだから。

今後は若し國家が澄まなければ、我々男性が澄ましてやる。男性が澄まないならば、我々女性が澄ましてやる。その吾々女性といふのは、唯誇大妄想狂でなくて、本當に自分が婦人の道を建設し、そこを歩み、そこで生活する、かういふ風に自己が一つの要求を滿しておいてからでなければ、人に要求しないといふのが日本精神の一つだと思ふ。即ち自己が生成をして、人に化育を求める。自己が澄んで、人に澄むことを要求する資格が出來る。だから人を澄まさんと欲すれば、自己が澄め、といふことが、日本の一番の精神だと考へる。今まで日本の婦人が男に頼つたといふ部分がいゝ部分と惡い部分があるのである。例へば常會に行つても、男が出てをれば、女なんといふものは附物だといふ考へになる。何かにつけて、そんな風で瘤みたいになつてしまふ。さうでなくて、夫に死ぬことが必要であるけれども、一かどの完全婦人であるといふことを忘れてはいけない。完全

婦人として初めて家に死ね、夫に死ね、子供に死ねる。不完全な夫が然るべくやつて呉れるからいゝ。女ののさばる場合でない。のさばるといふ言葉は一寸をかしいが、兎に角さういふ依存主義ではなくて、先刻言つた夫に死に、子に死ねるといふことで、非常な教養の高い婦人で而して純だといふことでなければいけない。子供を教育し、家に本當の家精神を充實させて、夫がをらなくても立派に守つて行くといふ場合に於て、やはりそれに必要なる高い教養がいるのではないか。それは必ずしも外國の物質的教養とは私は言はないのである。精神的な方面に於て特に高いものの事である。

本當に忠に眼覺めてゐる夫に溶け込む妻でなければ、國家に忠にならない。子を通して本當に國家に生きる母でなければ、母として忠にならぬと同じに、家庭第一主義であるべき女性が、家庭はいゝから社會に出て職場を持てと、職場へ出る。その職場が本當の國家の方向にぴたつと脈を合せた動きをしてをらなければ



その職場で勉强する娘さんは國家に忠にならぬ。職場が、澄んでをれば、その職場に殉ずることがその娘としては最大の生き方である。所が今さういふ生き方をやれといつて、やつて果して國家の爲になるか、不爲になるのか分らない。本當にその職場が澄んでをれば、極端にいへば、カフエーでもバーでもいゝと言ふのである。そこに來るお客に、本當の慰安、物質、精神兩方面に於て明日の活動の素地になる何ものかを、あの婦人達が與へることが出來るならば、さういふ純なカフエー、バーであるならば、そこに職場を持つことは日本婦人として決して恥しいことではない。それが濁つてゐる爲に、本人は幾ら眞劍に働いても國家の爲にならない。詰り池に子々が湧いてをるのである。その池が本當に澄んでをる所で働けば、本人も働き甲斐があると同時に、その職場に滿足して殉じ得る。ところが今迄は政治が濁つてゐた。その爲醇一になる事が出來ない憾みがあつたが、今日は大東亞戰に立上つたことによつて、その濁りを國家が捨てゝ澄んで來てゐる。そして國家が澄めば、私達の行く道は分つてゐるのである。だから行かなく

てはならぬといつて、今の女性、青年達が自分の道を澄みつゝ建設して行く。かういふ風に行くのが自覺だと思ふのである。

日本人の滿足といふものは、外國人の物質の滿足と違つた方面に愉悅を感じ、自己に明るさを見出すことである。現代で云へば、兵が戰場で　天皇陛下萬歳を叫んで死ぬ時の滿足である。純眞に夫に殉じ得た婦人は、非常な滿足と明るさを感ずる。子供を本當に生かし得た母は、これ程滿足と明るさはない。その明るさ心の內面的なものを日本婦人は表面には出し得ない。これを現代の物質的批判觀點から見ると、如何にも慘めに見えるのである。けれどもそれに慘めだといふ認識を與へることは、私は婦人の輕蔑だと思ふのである。兵が戰死してゐるのを見て、單純にそこだけを見て、慘めと見る國民があつたら、これは國家の蠹賊である。と同時に日本の本當の精神ではない。そこにやはり一つの明るさを認めて、立ちあがるといふことがないと、今のやうに外國の物質的な觀方を以て直ぐ秤量



すると、日本の本來の精神的な方面の生き方を非常に害ねると思ふのである。だから自己を或るものに生かして行くといふ場合には、個人的に見ればそれは死んでゐることかも知れないが、やはり大きく生きてゐるのだといふ喜びと、本人の明るい心持を育てゝ行くことが、結局私は日本の國民をやはり育てゝ行くことであると思ふ。上は與へる。下は自己を捧げて行く。お互に與へ合ふ、捧げ合ふといふ心持の一致でないと、外國的に奪ひ合ひになると思ふ。將來の建設もさういふ根本的なものに基礎を置いて考へて行かないと、慾には眼がないからどこまで行つても滿足は與へられない。長いことだが　明治天皇が「萬機公論に決す」と仰せられた。それだから議會が中心でいゝではないかといふことになつたなら、國家の破壞である。お上は萬機公論に決するといふ思召をお示しになつたが、我々下の者は萬事　天皇中心である。かういふ風に行つて、一體になつた所が日本の國體であると思ふ。總てがこれで行かぬと、必ず私は個人主義になると思ふ。故に建設も、やはりさういふ意味に於ける基礎を大きく持つてゐないと、日本精

神なり國體なりに浸徹しないと思ふ。

嘗てパーマネントがいけない、日本髷に結へといふことで、皆んな文金の高島田に結へといつた連中がある。文金の高島田でバスの車掌をやらしてごらんなさい。工場でハンマーを振らしてごらんなさい。そんなことは出來はしない。無暗にさういふ形骸に囚はれることは、いけない。私は復古といふ言葉が既にいけないといふ位に思ふのである。これは上に現神であらせられる　天皇陛下がいらせられるのだから、現在傳統の上に一番いゝものを築いたのが維新で、復古といふのもこゝである。その新しさでなければ、單なる古に囚はれた復古は退歩である。本筋に還つて現在的に生きて行くことを、あゝいふ言葉で言ふのではないかと思ふ。私は歌の方でよく言ふのであるが、萬葉の時代に歌といふものは國民的所有物であつた。然るに平安朝時代になると、有閑階級の玩弄物となつた。さうすると歌といふものが消極的な退嬰的なものになつてしまつた。あの時代には政



治に關係せず、同時に戰爭にも關係しない宮中奉仕の人々や、出家遁世の坊主などが歌を詠んでゐた。それが文献に遺つて、短歌といふものは斯の如きものなりといふことになると、短歌といふものは退嬰的な隱逸的なものといふ短歌觀を與へてしまふ。さうすると元來日本の民族の、建設的で、健康的で、進取的で、雄渾博大な短歌が、退嬰的で、隱遁的で、隱逸的なものだといふことになつて、短歌は國民を亡ぼすものになる。短歌の傳統を途中から考へて、或る時代だけの短歌觀を以て、短歌はかういふものだと考へて來たら、時代を解決する仲間に入る資格が短歌にはなくなる。傳統を、新時代の人が本當に研究するなり檢討するなりして、建設して行くことが新文化だと思ふのである。

外の方面は知らぬが、短歌は四十年近くやつて居るが、敷島の道といふ道が今の歌から失はれてゐるのである。本當の敷島の道といふのは、日本精神の生命、純一といつてもいゝのであるから、この至純の所に心が行き着いた時を、私は澄

みといつてゐるのである。不純な者には本當の歌は出來ないのである。それを三十一文字で表現して行く度に、自己錬成をやるなり、靜坐をやるなり、禊をやるなり、やつてゐる譯なのである。さうして自分の心を本當に純化して行く。神ながらの方からいふと誠といふかも知れない。

近頃、私がよくいふ清・明・澄・爽・凛、これが日本人の心である。三種の神器を精神的に見ずに、相で見る時に悉くやはり清・明・澄・爽・凛である。玉でも凛然たるものがある。玉は丸く柔かく溫かくして、何ともいへない濕ひがあるけれども、凛といふものを失つてゐない。劍と鏡の如きは言ふに及ばない。日本の婦人でも、品、韻、凛といつたやうなものを一つにしたその强さが、日本婦人の强さ、吉田松陰に言はしたら何といふか、果斷と言つたであらうが、そこまで行かないもう一歩前の心ではないかと思ふのであるが、これは俗に言ふと、一度水商賣をした人が幾ら服裝を整へて奥さんらしくしても、初めから奥さんとして



ずつと暮して來た人とは、凛といふ所で、吾々が見ても違ふ所がある。所謂氣高さ雄々しさである。

日本女性の凛々しさは、子供を教育してゐる時に、日本婦人が「いけません」といつた時の强さは、男の「いけない」よりは强い。そこに愛の心があるからで最後でなければ言へないであらうが、本當の愛を徹底した凛なのである。それであるからほんとうは、凛だとか澄だとか分けてはいけないので、日本人の心といふものは清・明・澄・爽・凛が一つになつたものと見なければいけないと思ふのである。

嘗ての女學校教育は、家庭生活を標準にせずに夫婦生活を標準にした爲、姑のをる家に嫁くのはいやだといふ氣風まで養成してしまつてゐるのである。これは國體的に見て大變なことである。日本では一家が一體となつて、お母さんもお父

さんも皆がゐる。その中で生きて行くといふことが、一番大事な教育でなければならぬ。であるから私は教育をうけたといふ所謂知識婦人なるものゝ國家認識さへ凝ふのである。日本の國體では單純に至上の一點に向つて歸一するといふ根本精神が徹底すれば、默つてをつても、國家は支持されて行くのである。

自分の家で店をやつてゐる。そこで娘を女子商業學校にやつた。さうすると家に歸つて來て、自分の店の經營をやらずに、銀行や會社に勤める口ばかり探してゐる。これが日本の今迄の間違つた教育である。

母親が寢物語によつて教育をするといふことは、何もその形に囚はれなくてもいゝけれども、知識を知識として子供に與へずに、血と魂として與へるといふ意味である。その方法論としては、現代に必ずしも寢物語がいゝかどうか、これは十分檢討を要するが、唯物的に本を與へて、子供をキンダー・ブックと一緒に部



屋に放り込んで置いて、夫婦手を携へて外出して了ふ。あれは私は馬に秣を與へる如きものと思ふのであつて、秣といふのは厩舍に馬を入れて放つて置くと、搖り癖といつて體を熊のやうに搖る癖や、厩の板を叩く癖、ものをガリ〳〵と咬む癖がつくのである。その惡癖を防ぐ爲に食物で胡麻化す、その食物で胡麻化すのに一度に食つてしまつてはいけないので、秣を置いてその前に格子が置いてある。その間から馬が苦勞して秣を一本か二本咥へ出す。それを仕方がないからカリ〳〵咬んでゐる。その方に氣を取られて惡い癖がつかない。その行き方で、子供を惡い方に行かせぬことだけは、本を充がつて置けば出來るかも知れない。あれは秣である。本當の魂と血を入れる方法ではない。日本の母は子供に魂と血を注いで行く、それは本當の母のものである。寢物語なり夜語でお母さんが舌切雀の話をして、子供と一緒に笑つて「そんなことをしては駄目ですよ」と教へるとそれが生きて行く。唯子供に舌切雀の本を與へたつて、子供はそれだけの魂と血を受容れない。そこが大事なのである。

よく上流の家庭や知識人の家庭では外國の眞似をして、子供の部屋を拵へて子供を入れてゐるが、あれは日本の生活ではない。個人主義の生活であつて、本當に日本的に育つた子供は納つてをらぬ。いつの間にか出て來て、親の側にゐる。或は兄弟と一緒になつてワア〳〵言つてゐる。中學に行くやうになると、自分の部屋に納まるが、中には親を忌避して納まるのである。さういふ親を忌避するやうな精神は、自由主義、個人主義の最も甚だしいものである。それを子供に部屋を與へて、そこにをらせるのが文化生活だと心得てゐる。子供の部屋はあつてもいゝけれども、みんな一緒に飯を食ひ、冗談を言ひ、時には子供を脊中に乘せて親爺が這ふといふ樣な一體に溶け合つた團欒の生活、それが本當の日本の生活でそれが所謂教育などといふ輸入した言葉でなく、日本古來のしつけといふ言葉だと思ふ。

絶對忘れてならぬものは國體である。婦人達は本當の意味の國體が、解つたやうで解つてをらぬものがあると思ふ。國體といふことを考へて、しつかり自己に摑んで欲しい。さうすれば今の純に死ぬことも出來るし、立場や動きを誤らない。立場や動きを本當に誤らなければ、どこまで行つても本當に生きて行けると思ふのである、

# 世界で一番えらい女性

從來の日本婦人は大體に於て精神的に依存主義であつたやうに思ふ。然し、婦人は婦人として依存ではいけぬ。婦人は婦人として持つものを瞭り持たなければいけないと思ふ。處が、夫唱へて婦和すといふことが、結局女には人格がなくていゝ、極端にいへばであるが、大體さう見える行き方が客觀される。然し將來は、女と雖も日本の婦人は、婦人道に於て世界を指導するといふ。さういふ考へが、もう少し向上しなければならない。そして國内からいへば、夫唱へ、婦和すであるが、世界からいへば指導者である。國家觀念の認識、所謂世界觀、國家觀、人世觀といふものを、婦人は婦人としてもつと把握しなければいけない。今



迄婦人は國家觀、人生觀は稀薄だと思ふ。これをもつと向上することを現代婦人に望む。それを從來は、はき違へて妙な運動をやつたり、亭主や、子供を人に預けたりして、自分が獨立者の如く振舞ふ。さういふ婦人は日本觀、世界觀があるとはいへない。眞の日本觀、世界觀、人世觀があるならば、日本の婦人としても立派で、然も世界の婦人から仰がれ、指導者となる。それまで醒めることが現代の婦人に望ましい。客觀的に與へられる今迄の日本婦人の感じといふものは、さういふ意味に於て弱いと思ふ。弱いといつていゝと思ふ。いゝ意味に於てもう少し婦人は、本當に强くなるべきである。日本男子に拮抗する意味でなく、一體となつてゐる意味に於てである。

勿論婦人の、男を通しての國家觀、世界觀、人生觀といふものは大體出てをつた。それはさういふ行き方もあるけれども、婦人は婦人として世界觀、國家觀、人生觀を自分でしやんと摑んで、日本の婦人なりといふことで、夫と一體になる

べきである。

然し、從來の日本教育があやまり多いのと、又日本の文學がわるく、それが幇間文學であつたり、幇間雜誌、太鼓持雜誌などあつて、外國の思想、アメリカ邊りの影響を受けてゐた。だから婦人の心理といふものも、さういふ方面に無自覺に動くものを持つてゐた。殊に日本の婦人はさういふ意味に於て、今迄何時でも追從して行く立場に置かれた婦人であつたから、惡い方面に發展させて了つた。然し本當の婦人の良さに目醒めれば、問題はないと信ずる。何となれば曾ては雜誌の表紙繪にしても、口繪にしても、國家になくていゝものがのさばつてをつた。ダンサー、藝妓、或はバー、カフエーの女、女優、寶塚の何とかいふものが天下の婦人の一番崇拜する人物の如き感を呈して、社會に有名になつた。そして地道に家庭を建設し、子供を育て、或は職に從事してゐる女は、緣の下の力持——といへば力持ちでもいゝけれども、存在さへも國家から認識されてゐない。



さうすると人間の名譽心なり、虛榮心は、どうしても華かなものに向つて憧がれる。誰もさうである。それがいゝ意味では立身出世の向上心ではあるが今迄恰も立派なものゝ如くいけないものをみんなの前に見せてゐた。これは實に婦人に對してお氣の毒であつた。と同情心をこゝに寄せれば寄せられるわけである。併し同情を起さす人間は實に詰らない人間だと思ふ。弱き自己に甘へ、哀れな自己に甘へ、人に甘へてはいけぬ。さういふやうな意味でも强くなれといふことは、信念に生きて行けといふことである。

又若し、婦人が自覺して、自ら國家の方向に働きをせぬならば、國家としてはもつと婦人の動員といふものに就て、やらなければいけぬと思ふ。そして婦人の壯丁名簿といふものを作つて、そしてそれに依つて、女を職能方面、活動方面に動員して、二週間なり、三週間なり教育をやる。教育をやつて、家庭にかへしいざ必要の時は動員する。即ち必要に應じ、これ〳〵の者は出て來い。これ〳〵の

者も出て來いといふやうにやる。不斷から、料理屋の女中でも何でもそれだけの腕を持たせるやうに教育してあれば、それをパッと動員出來る。

日本では子供が電車の中で人に席を譲つて貰つて、直ちに腰掛けるが、ドイツの母ならば、お前は立つてをれ、と立ち得る子供は立たして教育をしてゐる。と此間いつてゐた人があるが、日本なら席を譲つて貰つて腰掛けさしてゐる。鍛錬の好機を捉へそこなつて居るのである。日本婦人はうんと自覚して、鍛錬されるより、進んで自ら鍛錬の機會を捉へてそこに身心を打ちこんで欲しいものである。

（終）



出版會承認
イ二五〇一七九
著者檢印

名婦評傳　㊟定價參圓五拾錢

著作者　齋藤瀏
發行者　渡邊久吉　京都市河原町二條下ル
印行者（西京一六二）堀尾幸太郎　からふね屋印刷所　京都市東山縣七王門西
發行所　人文書院　京都市河原町通二條下ル　電話上一八四八番　振替〔大阪八三六三番　東京二八四五九番〕　會員番號一一二二五三
配給元　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二九
印行　昭和十九年一月二十日
發行　昭和十九年一月廿五日
（六、〇〇〇〇）

# 萬葉名歌鑑賞

齋藤瀏著

定價 參圓五拾錢
送料 拾五錢

著者三十年の努力と精進に依つて成つた萬葉集四千五百首中の名歌を鑑賞したものである。そしてその鑑賞は飽迄も著者獨自のもので、深く、鋭く、且つ大きい萬葉入門書中の白眉であらう。

---

早大教授 文學博士 西村眞次著

**人類と文明**

四六判 二七〇頁 價二・〇〇 送〇・一〇

例に依つて、その博學振りを發揮した書であるが、人類の發展を文化史的にみた諸種の論文を始め、人類學的、考古學的隨筆、隨想をも盛つてゐる。

九大元教授 藤澤親雄著

**日本的思惟の諸問題**

四六判 三〇〇頁 價一・八〇 送〇・一四

日本學の權威者として知られてゐる著者が精魂を傾けて成した書。新世紀の人類普通原理であり、時代の要請するインテリゲンチャの必讀書である。

倉田百三著

**日本主義文化宣言**

四六判 三〇〇頁 價一・五〇 送〇・一四

新しい日本の文化に熱烈な運動をして來た著者は、今や漸く新日本文化が築かれんとする時、本書を世に送れる。大いなる愛と信仰は讀者をして、倉田氏に心醉せしめるであらう。

金澤醫科大學教授 醫學博士 古屋芳雄著

**民族問題をめぐりて**

四六判 三三〇頁 價二・〇〇 送〇・一五

醫學者にして、同時に筆の人である博士の生物學者、衛生學者としてのもろ〳〵の民族問題に觸れたもので民族問題の八釜しい折から必讀の書。

---

太田水穂著

**和歌上達の書**

新四六判 二七〇頁 價一・八〇 送〇・一〇

如何にすれば和歌は上達するのであらうか。又、如何にすれば、和歌を作ることが出來るかを、やさしく、懇切に說いたのが本書で、初心者も、心得ある人にもいゝ書。

文學士 片桐顯智著

**明治短歌史論**

四六判 三六〇頁 價二・三〇 送〇・一五

本書は傳統的文學である短歌が如何に歷史的に展開したかを追跡したもので、現代的立場よりも寧ろ歷史的立場に於て、傳統性と時代性の十字點に於て把握したものである。

歌人協會賞

岡山巖再版

**現代歌人論**

四六判 三三〇頁 價二・〇〇 送〇・一五

空穗論、利玄論、岡麓論、川田順論、文明論、茂吉論、憲吉論、牧水論、白秋の九篇。論、作兩樣を完備する氏の歌人論。

歌人協會賞

岡山巖著

**現代短歌論**

四六判 三三〇頁 價二・〇〇 送〇・一五

著者は生活、歌論の離るべからざる相互關係を力說し更に其の世界觀たる全人間的創造的立場に立ち、それら深刻なる諸問題の探求と解決に精進せる歌論。

松村英一著

## 短歌の作法と鑑賞

四六判　三四〇頁
價二・〇〇　送〇・一四

「作法篇」「鑑賞篇」「實作指導篇」の三部より成り、作歌の要諦を說き、現代短歌を精細に吟味し、百數十首の實作歌を擧げて親切に指導してゐる。

岡野直七郎著
協會賞

## 短歌新論

四六判　三一〇頁
價二・〇〇　送〇・一四

現代の歌壇にあつて、實作者として、同時に批評家として活躍してゐる著者の歌論集である。本書は、著者が新浪漫主義を歌壇に提唱した以後のものである。

岡野直七郎著

## 歌壇展望

四六判　二〇〇頁
價一・五〇　送〇・一〇

輓近の歌壇を展望的にみたものである。新潮に毎月登載され、好評を博したもの、今その覆面をぬいで讀者にまみえんとするのである。

土岐善麿著
隨感隨想

## 滿目抄

四六判　三一〇頁
價二・〇〇　送〇・一五

春の表情▼新鐵道唱歌▼島崎先生と語る▼楚人の一面▼ベルリンに聽く▼審査員としての覺悟▼木下利玄に就て▼短歌長詩の吟誦▼征けよますらを▼他二十數篇。

川田順著

## 山海居閑話

四六判　三三〇頁
價二・〇〇　送〇・一五

文學者としてよりは歌壇の重鎭として、住友の重役として縱橫の腕を揮つた著者の處世學を、隨筆小品の形に借つて、面白く書いたものだ。

岡本かの子著

## 希望草紙

四六判　三三〇頁
價二・〇〇　送〇・一四

作家として、歌人として、批評家として活躍する女史の、文字通り八面六臂の奮鬪を語る隨筆集。そこには常に若々しい情熱と希望があつた。

津軽照子著

## 手かゞみ

四六判　三一〇頁
價一・八〇　送〇・一四

女流歌人として、女流畫家として、名流婦人として夙に知られてゐる著者が、手かゞみの如く祕め、愛惜する、隨筆、隨想集である。

太田水穗著

## 螺鈿歌集

四六判　三六〇頁
價二・二〇　送〇・一八

純正日本の傳統に立ち、萬葉、古今を骨肉とし、鍛ふに新古今の艶と芭蕉の寂をもつてしてゐる歌風が著者獨自のもので、本書は昭和九年以後の作品集だ。

---

藤田德太郎著
帝國學士院恩賜研究費授

## 近代歌謠の研究

菊判　五〇〇頁
價三・〇〇　送〇・三三

教授が學位論文のつもりで精魂を打込んだ書。稀覯の原色、凸版、寫眞百餘。近代歌謠は吾人の生活と連鎖多き故、一般の讀者にも、專家にも向く。

森本治吉著
二松學舍教授

## 萬葉集新見

菊判　三〇〇頁
價三・二〇　送〇・一四

本書は第一部歌解、第二部語註解より成り、實に著者廿年の研究集成である。その引用歌の豐富は、索引の新工夫と相待つて萬葉研究の至寶。

東京帝大元教授理學士
東光治著

## 萬葉動物考

菊判　五〇〇頁
價四・五〇　送〇・三三

廣く同じ時代の文獻や遺物を調査し、萬葉動物とも對照して當時の生物の生育狀態を推定した上、その名の由來を究め、更に現代の動物分布や季節變化を考慮して判斷してゐる。

新口信夫博士序文
高崎正秀著

## 萬葉集叢攷

菊判　三一〇頁
價二・八〇　送〇・二二

日本思想の精華萬葉集は唯だ文義的乃至は文字的解釋では解決出來るものではない。この意味から、教授は、これを民族學的に研究しつゝある學者として特異の立場にある。

佐佐木信綱序文
齋藤瀏著

## 萬葉名歌鑑賞

四六判　三〇〇頁
價一・八〇　送〇・一五

著者廿年の努力と精進に依つて成つた、萬葉集四千五百首中の名歌を鑑賞したものだ。萬葉と云へば難澁な面白くないものとされてゐたが、本書の出現に依つて甫めて大衆化された。

東京帝國學士院會員
風卷景次郎著

## 新古今時代

菊判　六八〇頁
價四・五〇　送〇・三三

「新古今集」「作家篇」文獻篇に三大別され、その考察吟味の哲學的であることは、風卷氏の恐るべき頭腦のよさを雄辯に物語るものである。

川田順著

## 俊成・定家・西行

四六判　三三〇頁
價二・〇〇　送〇・一五

本書に收むるは、俊成・定家・家隆・西行・玄鑑・良經に對する縱橫の評論と名歌鑑賞と「新古今と萬葉集」「藤原家隨論」「西行傳記歌鈔」等で幾多の新說と示唆を藏す。

太田水穗著

## 神々の夜明

古事記の地上展開

四六判　三三〇頁
價一・八〇　送〇・一〇

古事記の眞髓と云ふべき書で、古事記で明かでない所が、平易に興味深く、一般讀者層へまで展開された、昭和の夜明に偲ぶ神々の夜明を知ることが出來る。

人文 141-21

岡山巖著

## 短歌鑑賞論

四六判 三二〇頁
價二・〇〇 送〇・一五

前著「現代短歌論」「現代歌人論」に歌壇よりも寧ろ文壇的に轟々たるセンセイションを捲き起したが、本書はその三部作の一たるもので、著者が最も力を入れた書である。

岡山巖著

## 短歌作法の書

四六判 三〇〇頁
價一・八〇 送〇・一〇

本書は著者が論じ、實踐して來た著者獨自の短歌入門を詳しく述べてゐる。新人は勿論革新的短歌に入らんとする人の懇切な指導書であらう。

岡山巖著

## 寸感抄

四六判 三三〇頁
價二・〇〇 送〇・一

寸鐵人を刺すと云つた感で著者の歌人論以上に好評を博せるものである。歌人として批評家として、更に文明評論家として鋭い覺に依る鑑賞の隨感隨想錄である

山下陸奥著

## 短歌の表現と技巧

再版

四六判 三一〇頁
價二・〇〇 送〇・一五

複雜微妙な短歌の表現と技巧を一何故にかくの表現せねばならぬか一と云ふ其根柢を究明し、その表現の眞諦を把握せしめんとした處に苦心があり記述は實例を示して精緻を極めてゐる。

山下陸奥著

## 短歌の探求

四六判二八〇頁箱入
價二・〇〇 送〇・一〇

前著「短歌の表現と技巧」(再版)で好評を博した著者が、更に一歩を進めて、短歌を探求したものである。短歌に關心を有する人々の必讀書である。

半田良平著

## 短歌詞章

四六判 三三〇頁
價二・〇〇 送〇・一四

「國民文學」一流の重鎭たる著者は又歌壇切つての尊義者であり、堅實者であり、眞摯者である。これ多數の讀者を擁するゆえんであらう。

尾山篤二郎著

## 作歌道雜話

四六判 三七〇頁
價二・〇〇 送〇・一四

歌壇の彦左と云はれる著者の、作歌に對する。いろ〳〵の歌論歌話を集めたもの、企まずして歌の眞諦を把握し、不知不識のうちに歌壇の全輻を會得出來る。

松村英一著

## 短歌管見

四六判 三三〇頁
價二・〇〇 送〇・一四

著書を出すことを餘り好まず、ひたすら斯道に精進する著者が數年振りで上梓したものである。短歌に對する著者のいろ〳〵の歌論、歌話が收められてゐる。

992
49

終